
憑依者ユーノの物語

妄想人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憑依者ユーノの物語

【NNコード】

N2841Z

【作者名】

妄想人

【あらすじ】

この物語はもしユーノが憑依者だったらどうなるのか？そんな物語。

ーある決まった物語に俺が介入する時、その物語は変わりだす。

/ / / / / / / / / / / /

はつきり言って作者の妄想そして文才ないです。それでもよければどうぞ。

目次（前書き）

よければお願いします。

目次

俺は何故か何もない白い空間にいる。前、下、右、左、永遠に続いている。訳がわからないから考えようとしたら突然「やつと曰覚めましたね」つと田の前に女が現れた！

「あんたが、俺をここに？」

いきなり現れた事はどうあえずスルーして今一番の疑問を聞いたら「その通りです！」

やたら自信ありがちに答えて来た。

「……………変質者？」

「違いますよ！？何故いきなりそうなるんですか！」

「こんな意味わからんねえ空間連れ込んで位だし、それを自信ありがちに言われるとな〜。」

軽くふざけた感じで、バカかという田で田の前にいる女に言つてみた。

「ああーー絶対今かなり、怪しい人だと思いましたね！」な〜んて言つてきやがた。それ以外なにがあんだよ全く。

「じゃあ、あんたは何者なんだよ？」

事と次第によるならシバくぞつと俺は心の中で毒をはいていた。

「聞いて驚きなさい！！私は、 神 です！」

……俺はその答えを聞いて頭を抱えだした。

「フツフツフツ、驚いているようですね？」

確かに驚いている。その理由は

「誰か助けて下さいー田の前に頭を相当ケガをしている女性がいます！！」

彼女の頭はどうなっているかについて。

「なつー！つち真面目に答えていて、何て事言つんですか！」

「やかましいー完全に痛い人発言にしか聞こえないんだよー！」

「だから、本当なんですよー！」

「もういいから、病院行け！」

数十分その話は続いた。

「俺が死んだ？」

からかうのをやめ真面目に移ったと思つたらいきなり死亡宣告をされた。

申し訳なさそうに言つてきた。

「ふーん、そうなんだ。」

俺は興味がないように答えた。

「あの、怒らないんですか？」

「人はいつかは死ぬ。それが遅かれ早かれ変わらないぞ。」

「変わつてますね。」

「ほつとけ。」

「話が変わるのでですが、あなたにはもう一度人生やり直してもらいます。」

「何故に？」

「間違いで死んでしまった人にはそういうふになつてているんです。」

「それはどうかとおもひや？」

そして俺はある事にきずいたそれは

「俺の体ないんだけど？」

そう俺は事故で死んでしまい原型を留めていない体になつてしまつていてる。

「大丈夫です。あなたが好きなキャラになることができます。それにチート能力も貰えますよ！」

……用並みの展開です。そして俺の中で答えも決まってきた。

「リリカルなのはのユーノで、能力はいろんなキャラと修行しながら貰っていく。」

「えつ何ですか！普通カツコイイ主人公でしょうーそれに何で修行なんかやるんですか、チート能力貰つて無双すればいいじゃないですか！？」

質問多い神だな～理由話すしかないか。

「まず何故ユーノかといふと」

「どうと?」

興味深々と聞いてきて答えた。

「二ートになれるからだーー！」

「はあ?！」

「ストーリーは知らんが将来本の整理だけでやつていける。
格好悪!てか原作知らないんですかーー！」

「ああ、全く知らん！」

「そんなので大丈夫何ですか?」

そんな装備で大丈夫かのごとく聞いてくる。

「問題ないぜ。」

「はあ~わかりました。で、修行の理由は?（ビツセヘだらない理由な気がしますけどね）」

「その人達の覚悟、誇りを知り俺がそれを背負っていくができるか、だ。」

急に目の前の男の雰囲気が変わった。さつきまでのふざけた要素がまるで嘘かのようにまた男は語りだした。

「ただ能力を貰うだけじゃ意味がない。それを使う覚悟がなければ、その力に呑まれ破滅を生むだけだ」

まだ男は語る。

「なら俺はその使う意味をその人達の元で、修行をし誇りを持つて受け継いでいきたいんだ。」

私は啞然としてしまった。理由がスゴいとかそう言つ問題じゃない。その存在感のスゴさに思わず魅入ってしまっていた。

「な～んてな。どうだつた俺の演技凄かつたろ？本当はただキャラ
と話しがら貰えれいいだけや。」

また雰囲気が戻った。本当に訳のわからない変わった人ですね。

「んじゃ、体頂戴。後、修行の人達は でよひしく。」

「チートの塊ですね。まあいいですけどね。ではすぐに修行の場所
にワープさせるので出たい時は言って下わい。」

「了解。さて行きますか！」

ビーフせなら楽しい物語にしてこきたいな。まつ作者次第か？

—開始直後にメタ発言は止めて下を—

おっと注意されちまつたぜ。まあ、俺も頑張つてくとしますか！

目次（後書き）

反省会

「全くこんな調子で大丈夫なのか。続けていけるか不安だぜ。」

「本当に申し訳ない。」

「まあ、それは置いて次回タイトルは【やつと始まつた物語】だ。よろしく。」

「流すな！そして勝手に決めるな！」

「またいつか。」

「聞けよボケ！」

やへと姫めつた物語（前書き）

色々とかオスです。

おひと始まつた物語

おつす俺、憑依者ユーノ。前振り通りにワクワクしてゐるといひだ。
何故かといふと

「遺跡の中で見事に罠に掛かり、後ろから追つて来るゴーレムから
必死に逃げてるからだ!!」

「おーユーノー! 何いきなり大声出しあんだよー! びっくりするだらうが
!」

開始早々にハードな展開になつてゐる状況です。

さて何故俺がここにいるのか、説明しよう……。スマヤン少しへ
ンショーン上がつてます。

ゴホンでは、話します。俺はじ察してゐ通りに修行が終わり、そし
て今はスクライア一族のみんなと一緒に各地を轉々としながら遺跡
を回つています。

えつ、修行の内容と出会いにはどんな感じだったんですか?

その質問はまた後ほどでお願いします。

そして今になる訳なのですがといふか

「元は言えども、「ユウキが勝手に罠を発動したせいだらうがー。
「つ…」

「しかもわざわざ【押してね】何て、書いてある怪しき全開のボ
タンを押すバカが何処にいるー。」

「だつてやけに明るかつたから押せば、美女が出て来てウハウハと思ひ、つまり何が言いたいのかと言つと、俺【といづ名の変態】はここにいる！…と示したかつた。」

「スケエニヒニエエエイス！」

「グハッ…。何しやがんだユーノ！今俺、最高に格好いいセリフ言つたのに、全力で殴ることねえだろ！…」

「全てにおいて台無しだボケ！というかハオに謝れ、ついでにファンにも謝つとけ！今お前は間違いなく敵に回したからな！…」

何てくだらないやり取りをしている所です。 注意一応まだ走っています。

後、この人の紹介がまだでした。

名前はコウキ・スクライア。年齢は二十歳以上で、身長は170位あり、そんなに顔も悪くないのだが、ご覧の通り残念な人です。

ついでに俺の現在の年齢は九才という設定です。 やろつと思えば、年齢と身長など、いつも簡単に

「ユーノ！ そろそろ何とかしないとヤバいぞ！」

……コウキ少しば空氣読め。 といふか

「お前がなんとかしろよ。人に押し付けんなこの他力本願。」

「だつて、魔法使えない状態になつてんだからしようがないじゃん！」

！

何故かというと罠が発動したと同時に魔法を封じる罠まで発動したため、現在使えないのである。

本当めんどくさ～一重の意味でな。

「本当頼むー俺もう限界なんだ！」

「気持ち悪い」と呟つた「ラアー」貴様を生け贅にすんぞ！」

「すまん！でも、本当に体力の限界なんだよー。」

全くいい大人がだらしない。まあしうがないからそろそろ助けるか。

俺は立ち止まりそして俺の後ろにいる「ウキもそれを見守っている。ドツドツドツドツドツ…」と段々、二メートル近くある「ゴーレムが迫つて来た。そして俺は腰に付けてあつた、あるもの、を取り出した。

やがて「ゴーレムが目の前まで来てその『力い拳を振るつた。

「ユーノ！」

心配すんなよ「ウキ、余裕だからぞ。

俺はその拳を後ろに紙一重でよけると同時に俺の手に握つていた、あるもの、を当てそして響いた。

キイイイイイイイイ…

俺はその、音角、を自分の額までもついた。

「歌舞鬼…」

その後にユーノの周りには花風吹が舞い散り、そして左手を開き前に出し、同じく右手を開き顔の横まで持つていた瞬間に

「～～～～～ン、ハツ！」

その花風吹が散った。その先にいたのは、左右非対称の角をはやし、緑色と赤色をモチーフにした“鬼”を連想させる戦士がいた。

そして後にいる「ウキが俺に言った。

「なんで、そんなに身長まで伸びんだよ。しかも俺より高い！」

……」いつから清めてやろうかマジで？

「さて、無視して始めますか？ Let's Rock【派手に行くぜ！】

ゴーレムが今度は右ストレートをかまして来たので横に避けると同時に一気に懐に入り

「ウオッりや！」

左アッパーを喰らわせ、そのまま一回転をし右カカと落としを決め、相手を怯ませた。

まだ俺の攻撃は終わらない、今度は腰に付けてあつた【音撃棒・烈翠】を両手に構えた。

「ハアアアアアアア！」

声を上げると烈翠の先端に付いている鬼石に翡翠色の炎が灯しひ、そして烈翠をゴーレムに向けて振ると同時に炎が相手に向かつて放たれた。

「……」

ゴーレムは危険を感じ、両手での攻撃を防いだ。だが、その両手はボロボロでいつ壊れてもおかしくない。

そして歌舞鬼はゴーレムに接近し

「ハツ！セイ！」

その両手を破壊した。

「こいつは、オマケだ！」

勢いよく飛び上がり、ドロップキックをお見舞いした。

「ゴーレムは倒れてしまが、まだ動いてる上に腕まで再生しつつあるようだ。

「これで、終わりにする！」

俺は装備帯から、三つの火の玉が追い合っている絵柄の【音撃鼓・舞桜】をゴーレムの胸に押し付けた。舞桜が回転しながら大きく展開した。

烈翠を高く構える。そして、先端部の鬼石が煌めいた。

「音撃打・業火絢爛の型！！」

音撃打の型の名を叫び、清めの音を叩き込む！

「ハアアアアアアアー！」ダンダンダンダンとなんでも叩き込むその音は、聞くもの全てを魅力する。まさに【清めの音】だ。そして「ハアアアアアアアー！ゼエヤ！！」

その美しき演奏を終わりを迎えるとゴーレムが爆発起こし舞い散った。

俺は両手の烈翠をクルクル回しながら腰に戻し変身をとした。

「なかなか楽しかったぜ？」

「ヒルに笑い終わりを告げた。

「いや～難なく終わついで！」

「んな訳ねえだろ！コウキのせいで俺が余計な使ちまつたろうが！」

「だからって蹴る」とねえだろよ。それに戦ってる時、結構ノリノリだったじゃん。」

「それはそれ、これはこれってやつだ。」

「ヒドくないか？！」

俺があの後、ゴーレムを倒したら魔法の罠も消えて俺がワープで、外に出て今は船の中だ。あのゴーレムが罠の元だったらしげ、結局は一石二鳥で終了だ。

後、何故俺達は船の中にいるのかといつとここの遺跡調査は、その奥にあるロストギアの調査とその回収だ。本当は楽に終わるハズがどつかの馬鹿のせいで時間が掛かつたけどな。

それでロストギアは無事に回収し管理局に送り届けるところだ。
えつ、そんなもの持つていなかつた？そりやそつと、別の人預けてたからな。

「あ、ユーノさん探しましたよ。」

「おっ、悪いな。この馬鹿のせいで迷惑掛けた上に、面倒に巻き込んじまつて」

「いえいえ、私達もなかなか楽しかったですから、そんなに謝らしても大丈夫です。」

そう、俺達は多人数來ていたのだ。
だが、罠のせいでトラブルになりその時に、ロストギアを渡し俺達は、囮になつたのだ。

「てかその敬語やめないか？あんたの方が年上だぜ？」

「いえいえ、気にしないで下さい。後、この子をお返しますね。」

『ユーノ、無事のようですね。』

「おっ、レイ お疲れさん。悪いなお前にまで、面倒事を押し付けて」

『気にしないで下さい。それにユーノが無事で良かったです。』

「そっか、ありがとな心配してくれて。」

今話しているのは、俺の相棒でデバイスのレイジングハートだ。長い名前だから俺は愛称でレイって読んでる。

レイを預けていたのは、無事に遺跡を脱出が出来るルートを組み込んでいたから彼女達に預けていた。

「いつ見てもお前らの愛は深いな。」

今まで黙っていたコウキが急に話しだした。

『コウキ、からかわないで下さー』

どこか恥ずかしげにレイが反論した。

なんでだ？…… そつか！

Said コウキ

今までユーノにからかわれたので、レイジングハートを標的にしたのだが、ユーノが

「レイ！遠慮なんかすることはない！俺はお前の事を愛しているぞ！」

愛の告白を始めました。

『えつーちょーゴ、ユ、ユーノ急にどうしたのですか！？』

ほら盛大にテンパってるぞ？まあ、俺も聞いたしねつき来た彼女なんて顔が真つ赤になつてみてるしな。

「お前は自分が人ではないからと俺に遠慮しているのはわかる！だがそんなの関係ない、俺はお前といつ“存在”を愛しているんだ！」

！」

ユーノお前色々とスゴいぞ。顔まで決め顔になつているが、あれは

気づいてないな。お前、軽く女落せるぞ？

『い、いいのですかユーノ？私があなたを愛しても？』

「ああ！俺は全てを受け入れる！それが何者だらうと関係ない！俺は愛し続ける！！！」

『ユーノ！』

「レイ！」

ユーノがレイジングハートを抱きしめ【？】愛の劇場は終わった。

天然バカツブルらか貴様らは！

見ろそのばいた少女がオーバーヒートして倒れているぞ！

ユーノ、時々お前がボケなのかツツコミなのかわからなくなるぞ。

Saidユーノ

ハツハツハツ！盛大に恥ずかしかつた。

「そう言えば、回収したロストギアはどんな能力を持つてんだ？」

コウキが俺に質問してきた。ちなみにそこにいた少女は、放心状態になつたので退場しました。

「ああ、ジュエルシードって言つて願えば、なんでも叶うらしいぞ？」

「へえ～夢のようなアイテムだな。」

「なんだ、お前なら飛びついて欲しいって言つたのに。」

「自分の願い位自分で叶えるよ。」

たまにはいい事言つな。

「相手を落としたという充実感をノギヤあ！」

感動を返してくれホントマジで。

「ボディーブローはきついぞー。」

「つるさい。それに願い事をしない方がいい。」

「何でだよ?」

「その願いを歪んだ形にしてしまうんだ。」

「歪んだ形、例えば?」

「お前がモテたいといと願えば…」

「願えば何だよ?」

俺は心底嬉しい顔して告げた。

「ヤンデレハーレムの出来上がり~」

「いーやーだー!」

…「ウキってオモシロつー ビニのコンゴ死神だよ。

数時間後

「なあ、ユーノ?」

「何だ?」

「船、揺れてないか?」

「そうだ【ドオオオオ】!…」

これは爆発か…!マズいジユエルシードに何かあったのか…?

「おい、レイ起きろ!」

『何でしじうか旦那様!』

「あれ!まだ起きてないのか…!」

レイはさつきのやり取りでスリープモードに入っていたがまだ完全ではないようだ。

「とりあえず行こうぜユーノ!」

「ああ！」

頼むから面倒な展開はよしてくれよ。

『どうやらHンジン室が何者かの手によって爆破されたらしい。今はそれよりジュエルシードだ！

「着いた！」

俺達はジュエルシードが保管されている部屋にたどり着き入った。

「――」

ジュエルシードが入っている箱を全身黒ずくめのヤツが持つていやがる。

「これは頂く……。」

声からして男か？だがそつはいくか！

俺は瞬時に相手の前に跳んだ。

「――」

相手は驚き拳を上げた。だが俺はその腕を掴み、地面に着地しながらその腕を回し相手は宙に浮かんだ。そして俺はクルリと回り左足で蹴りを喰らわせた。

「グハツ！」

男はそのまま壁に叩きつけられジュエルシードもばらまかれた。

「アソッ素手でも強いんだなー。」

『さすがユーノですね。』

「ウキは感心しレイは当たり前の事だといつ感じで言っていた。

「フツフツフツ。」

倒れている男は急に笑い出した。

「何が可笑しい？」

グラッ！

何だ船が揺れ出した！

『コーノ…』

「何だレイ！」

『すぐそこまで、次元の嵐が近づいています……』

「何！」

この展開の悪さまさか

「そう俺が全部起こさてた。」

黒男が話すと同時にヤツを囲むように穴が空いた。

マズいヤツの周りにはジュエルシードが！

「追えるものなら追いついて来い。」

そしてヤツは落ちて行きジュエルシードもある壁にばりまかれるようになっていた。

「クソッ！」

俺は穴に向かい走り出しだが

「待てよコーノ！」

「どけウキ！俺はジュエルシードを追ひつい！」

「ウキに阻まれた。

「お前わかってるのかよ、こんな次元のど真ん中に飛び込むつもりか？自殺行為だよ！？」

『その通りですコーノ！今日は無理です。』

「一人とも本気で心配してくれてるだが

「無理だ。」

「何でだよー。」

「俺はある星にジュエルシードが落ちてこくのを見たー。ほつとかるかよー！」

「そんなの管理局に任せれば…。」

「いや、あの組織がすぐに動くとは思えない。それにジュエルシードは一歩間違えば、星が消えるかもしれないほど危険なんだ！」

「……どうしても行くのか？」

「ああ…。」

「なら俺も…。」

「駄目だ。」

「何でだよー。俺も着いていた方がー。」

「ああ、確かに心強いよ。でもな

「あんたにはスクライア一族のみんなに俺が無事だという報告してほしいんだ。」

きつとみんなは俺の事を心配してくれるはずだ。だから、連絡係が必要なのだ。

「……ユーノ約束しろよ。」

「必ず帰つて来い”だろ?」

「ああ…。」

そして「ウキは道をあけ、俺は進んだ。

「悪いけどレイ、付き合つてもいいつさ。」

『わかりました。ですが無理は許しませんー。』

「善処する。」

そして俺は六に前に立った。

「ユーノ本当に本当に無事でこうそして帰つて来いよーーー！」

「ウキが力いっぱいに叫んだ。

俺は振り向かず右腕を横に出しサムズアップをした。

「行ってきます。」

そして俺は穴に飛び込んだ。

Said 「ウキ

「行つてこい、ユーノ・スクライア。帰つてきたら元気よく笑顔で、
ただいまって言えよ？俺達はお前の事が大好きなんだからな！！」
俺は聞こえるはずがないのに涙をほんのり流しながら叫んでいた。

「ひとと始まつた物語（後書き）

反省会

「す、ぐ、きなりすぎないか？」

「自分はこれが限界何です。」

「次回続くのかよけんな調子で？」

「頑張つてみます。」

「あつそ、そして次回タイトルは【旅行は計画的】だ。」

「だから勝手に決めるなフレッシャーかけんな！」

「良ければ読んでくれよな～！」

「お前は話しを聞くことを覚えろ！」

旅行は計画的（前書き）

奇跡的に連続で投稿できています。

旅行は計画的

毎度！憑依者ユーノです。
現在の俺の状況を説明します。

「次元の中で、右も左もわからいつまり迷子です！」

『カツ！悪いですよ、ユーノ。さっきまで、あんにに啖呵をきつて
きたのに。』

「やめてくれ。俺も気にしてるから…。」

そうあんなに前回格好良く決めたのに今はこのザマですハイ。

『普通、生身で次元の嵐に突っ込んでそれを破壊しますか？』

「いやだつて降りたら田の前あつたから邪魔だし、それに避けてたらハウキ達にあたるだろ？」

何事もなかつたように淡々と話す俺だが、一話めですでに入外コースにはしつています。

『というか、さつきの次元の嵐を破壊したあの“剣”は何ですか？』

「ああ、あれは…」

『』で回想タイム……すいません、真面目にやらせて頂きます。

回想

俺が降りたさきには、次元の嵐が近いてきていた。

「クソッ！もうここまで来たのか…！」

『どうするんですかユーノ！？』

どうする。俺は『』のまま転移で避ける事が出来るが、上のハウキ達があぶねえ。

いや、それよりも！

「嵐程度が^{オレ}我の行く手を邪魔すんじゃねえよー！」の自然災害如きがああああ！！！」

「…どこかの黄金王の真似をしてみました。

「来い！【乘離剣エア】！！」

そして俺はその黄金王の最強とされる宝具を取り出し魔力を流し込み、エアの刀身が回転を始める。

その剣から放たれる魔力と力は誰もが息を呑み、そして絶対なる恐怖を与えると言つても過言ではないほど「存在感」を出してくる。

ちなみに俺の魔力は無限です。修行をしたらそうなり、体の作りもサーヴァントよりも格段上になつてるので、真名開放も問題ないのだ。

あえて言わせてもらうとチート乙ですね～。

やがてエアの柄の部分からなにかが放出し、回転速度も上がっている。

そして^{オレ}私は目の前の災害を睨みながら、真名開放を腕を振り絞り

「【天地乗離す】（エヌマ）！」

さらに回転を上げるエアを^{オレ}私は槍を投げるような勢いで

「【…開闢の星】…！」

その技を放つた。

回想終了

「あの後は、大変だつたな～。あまりにも威力がデカ過ぎて俺まで、吹き飛ばされたからな～。」

『全くユーノはスゴいのか馬鹿なのかわかりませんね。』

そして今になるわけだ。

さすがに自重しとくべきだと反省はします。

『それよりユーノ。
こんな派手な事をして大丈夫ですか？間違いなく管理局に目を付けられますよ？』

突然レイが質問してきた。何故かと言つとさつき放つた一撃は、次元の嵐さえいとも簡単に消し去ったのだ。これは、間違いなくロストギアに判定されて没収だ。

だが俺に抜け目はない！

「何故なら俺は、乗離剣工アさえ完全に防ぐ結界を張つていたのだ！」

『えつ！あの一撃を防ぐ結界を張つていたのですか？！』

「可笑しいとは思わないかレイ？次元の嵐を破壊する一撃を放つているのに、次元の大被害はなかつたろ？」

『！』

気づいたか？

そう、次元の嵐を凌ぐほどの一撃ならば何かしらの次元の歪みが生まれるはずだか、それがどこにも現れていないのだ。

これは、完全に防ぎきた証拠だ。

：吹き飛ばされたのは、忘れて下さい。

『ユーノ？』

「何だレイ？」

『アナタハナニモノデスカ？』

「やめろ！考えねようにしてたんだんだぞーーてか何で片言なんだ

よーーー

次元の真ん中で叫ぶユーノであった。

Sideなのは

初めまして私は高町なのは9才の小学四年生です。突然ですが、私は最近変わった夢を見ます。

夢の中に決まって私が泣いているとある男の子が私に何かを語ってくれて励ましている夢。ただ、当たり前に見えるが私には不思議な夢だった。

「どうしたのよなのは？急に黙りここんじゃって？」

「何かあつたのなのはちゃん？」

「…ううん。なんでもないよ。アリサちゃん、すずかちゃん。」

危ない危ない、今私は友達と一緒に帰っているところだった。

「そう言えば、私最近変わった夢を見るねよね～？」

突然アリサちゃんがそんな話題を出してきた。えつ？変わった夢？「何か見た事がない男の子と私が仲良く遊んでる夢を見るねよ。」あつ、私と内容が違うけど妙に、男の子、のどけた反応を示してしまう。

「でも、なんか嫌な気がしないのよね。不思議だわ。」

と何故か嬉しそうに話している。

わ、私も話した方がいいよね？

「アリサちゃんもなの？」

すずかちゃんに先を越された。うう。

「えつ？すずか、あんたも？」

「うん。内容は違つけど私の場合、一緒に本を読んで楽しそうにして

てる夢だよ。」

こちらも何故か嬉しそうに話している。

「…」で言わないと…

「二人とも私の話も聞いて！」

私も夢の内容について話した。

「三人が共通の夢を見るなんて不思議なこともあるのね？」

「確かに不思議なの。」

「もしかしたら正夢になるんじゃないかな？」

そんな話しをしながら私達は歩いていると

キ————ン

「————」「————」

突然聞いたことがない音が頭に流れ込んできた！

私だけじゃなくて一人も同じ反応をしてるの。

「今、変な音聞こえなかつた？」

「うん。あそこ…」

「公園から聞こえてきたの！」
と私達は気になり走り出した！

…待つて…二人とも速いよ…

ピ、ピンチです！

何がピンチかと言つと

「グルルルルル！」

黒い獸のが私達を睨んでいるからです！

公園に入った瞬間にこの獸が出てきたのだ。

「どうしようアリサちゃん？！」

「どうしようって言われてもわかんないわよー。」

「落ち着こうアリサちゃん、なのはちゃん！冷静にならないと

「グルルアアアア！」

獸のが飛びかかってきた。

「「「あやああああ！」」「

「ここで終わりなの？

諦めていたら突然、横から

「デストローヤー！」

ハーブロンンドの髪をなびらせながら、現れた男の子は獸にドロップキックを喰らわせた。

「「「えつー」「」」

私達は啞然とした。

男の子は着地して獸に向かつてこう言つた。

「最初に言つておく！」

「この雰囲気は決め台詞！一人ともも何か期待してゐる様子なの。

「さつきの言葉は、言つてみたかっただけだ！」

「「「えつーそっち！」」」

そして、この出逢いが私達にとって壮絶（ある意味）な闘いの始まりだった。

Side uno

アレッ！もう 終わりなのかよ！俺の話は！

『また次回ですね。』

マジかよ！

旅行は計画的（後書き）

反省会

「オイ！作者ー！」

「どうした？」

「なんか今回の俺の扱い悪くねー！」

「田頃の行いのせいだろ？」

「ぐつ、てか最後あたりなんだよ？なんか嫌なフラグが立つてたぞ

！」

「……気にするな。

「クソつ！次回タイトルは【原作キャラとの邂逅】だ！」

「ちょ、おまー！そこから普通持つてくかよ！」

「また次回だ！オラア！」

「やめる。コンボはやめてくれえええ！」

原作キャラとの邂逅（前書き）

評価をされているのが素直に嬉しいです。
正直、今回の話には不安です。

原作キャラとの邂逅

どうせ、前回中途半端に最後のあたりに登場した憑依者ユーノです。

現在俺はジエルシードに取り憑いている獣のを仕留めたところです。

後、御都合主義すぎるがそこにいた三人娘を助けました。

……別に狙つてませんからね！

あつ！俺がいつこの地球、‘海鳴’に来た説明をします。

プレイバック！……毎度ながらすみません。それとネタが古いですね。

数時間前

「やつと地球が見えてきたぜ。」

『長い道のりでしたね。』

俺達はやつと地球の前まで、来ています。

『ユーノ。何故あなたは、宇宙空間の中で普通に話せるのですか？』

「ああ、体の表面に見えない盾を纏っているからだよ。」

『体自体に魔法を纏っているんですか！？』

確かに驚くよな）。本来なら防御魔法は、自分の目の前にシールドを展開して発動する魔法なのだ。

だが俺が発動する魔法は、体に纏い呼吸代わりにもなっている。だが別に基本は使えない訳ではないが、俺が発動した魔法はまさに“

異例”である。

後、これ戦闘の時に装備して相手の事を攻撃したら、平和 静雄み
たいに國士無双になります。

『それとユーノどうやって地球の海鳴という所に行くのですか？』

ちなみに場所はさつき調べ終わっている。

そして俺はニヤリと笑い

「このまま大気圏突破だあああ！」

地球に向かい大気圏に入りました。

『えっ、ちょ！ 無理ですよ！ 止まって下さい！』

「大丈夫だ！ さつき言つたように盾纏つてゐるから！」

『どんだけ高性能なんですかその盾は！…』

言つとくがこれは俺のオリジナルの魔法だ。作るのに苦労したぜ、
フツ！

「さあ！ 地球に向けてGOだ！ 貴重な体験だから覚えとくよつにするか。」

『わやああああーよして下れい、 ュウウウウノオオオー…』

「無事に到着したな。なかなか楽しかったぜ。」
『もう嫌です…。』

あの後、俺達は無事目的地に到着し今は公園にいる。

『到着した所が人気がない場所で助かりましたね。』

「ああ、幸い夜だったから良かつたぜ。」

さてボチボチ探し始めますか。

考え方をしていると

キーナーーン

頭の中に音が響く、コレはジェルシードの反応だ！
それと同時に俺の第六感があるものを感じた！

『ユーノ！ジェルシードですか？！』

「ああ、後、別な何かを感じた！」

『何です、それは！』

それはな……。

「女難が出た！」

『はあ！？』

「俺の第六感が告げているんだ！とんでもない女難が俺に降りかかると！！」

言つておきますが、これはふざけていません。実は、修行をしている間に能力だけではなくその人達のスキルまで受け継いでしまったのだ！

しかも、修行の相手の殆どが女難を持っていたので、一気に俺に受け継がれた。

おかげで、俺の女運は相当（ある意味で）悪いのだ。

「クソつ！嫌な予感しかしないぜ。」

『今はそれよりジェルシードです！』

「俺にとっては、結構重要なんだが、仕方ない行きますか！」

そして俺は、誰も入らないように結界をはり、現場に向かった。

着いて見れば何故か女の子が三人いた！

何故だ？俺は“特別な力”を持っていないとの場所には居られない結界を張ったのに！

そして獣のが女の子達に襲いかかった！

チツ！考えるのは後だ今はジェルシードの封印だ！

そして俺は、獣に向かつて走り出した！

現在

「フウ～間に合つたぜ。」

『なんとか成りましたね。』

と一段落していると

「ちょっとアンタ！さっきの黒いの何なのよー！」

金髪娘が俺に話し掛けてきた。

「駄目だよアリサちゃん。助けて貰つたんだからお礼言わないと。」

ヘアバンド娘が落ち着いてというような感じで止めに入り

「そうなのアリサちゃん。とりあえず落ち着こうよ。」

最後にサイドテール娘が出て来て同じように止めた。

すると突然…

「グルルルアアアア！」

さつきの蹴り飛ばした獣が起き上がった。……封印するの忘れてました。

三人娘はびっくりして俺の後ろにしがみついて隠れた。

「ああ、気にすんな今なんとかするから。」

「どうやってよ…」

「ひつやつてだよ！」

俺は右手を前に出し

「チーンバインド…！」

俺の手の平から翡翠色の鎖が放たれた。

これは俺の得意な拘束魔法だ。極めれば、天の鎖並みにもできます。

「グウ…！」

「捕まえたの…！」

「ジルシード封印…！」

「グアアアア…！」

光に包まれやがてさつきの黒い獣は消えて碧の宝石だけがその場に残っていた。

「す」「…。」

はあ～やつと終わったぜ。

「そろそろ離してくんない？」

俺はいまだにしがみついている三人娘に言った。

「…」「…」「…」「…」「…」

一斉に離しだした。

オマケに顔赤らめてるし、……何でだ？

「それより、アンタは何者なのよー。もつ訳がわかんないわよー。」

「私も出来れば教えて欲しいな？」

「私もなの。詳しい事を教えて欲しいのー！」

女難が見事に当たつた瞬間でした。

「ふうんなるほどそのジルシードを追う為にわざわざ長い旅をしてきたのね？」

結局ばれてすべて話してゐ所だ。目の前でんなことがあったので、隠し気れない。

意外に三人とも俺の話しを信じてくれた。

「ああ、本当に長い道のりだつたぜ。」

「そのジルシードって何個あるの？」

「全部で21個だ。」

「集めるのがとっても大変だね？」

「まあ、頑張るよ。その為に来たんだからな。」

自然に会話をしている俺達であった。

「そだ、自己紹介がまだたな、俺はユーノ・スクライアだ。気軽にユーノって呼んでくれ。」

「あつ、私は高町なのはです。なのはって呼んでいいよ。私は君の事ユーノ君って呼ぶね？」

「ああ、いいぜ！ よろしくな、なのはー。」

「うん」

どこか嬉しそうに顔を赤らめて挨拶をしている。

「次に私だね。私は月村すずかです。私も出来れば、すずかって呼んで欲しいな?後、私もユーノ君つて呼ぶね?」

「おう!よろしくなすすか!」

「うん、よろしくねユーノ君」

小学生とは思えない、大人な微笑みを返してくれた。一いちらもほんのり顔を赤らめている。

「最後は私だね。私はアリサ・バニングスよ。アンタは私をアリサって呼びなさい?私はユーノつて呼ぶから!」

「へえ~強気な女は嫌いじやないぜ、アリサ?」

「!ななな何言つてんのよアンタは!」

顔を真っ赤にして怒っているが、嫌そうではないようだ。

ちょっとからかいすぎたか?反省しておくか。

「ユーノ君、首にあるそのネックレスは何なの?」
なのはが質問してきた。

「そうだ、まだコイツの紹介がまだだつたな。レイ、喋つていいで
?」

『わかりました。ユーノ。』

「うわつ!急に喋つたわよ!?」

「すごい!どんな仕組みになつてるのー?」

アリサは驚き、すずかは興味深々だ。

…すずか、改造しないでくれよ?

『改めまして私は、レイジングハートです。よろしくお願ひします。

』
レイが挨拶すると二人ともまた挨拶をした。

『今日は、ジリで寝るのですか?』

あつーそつだ。急に来たから泊まるといふがねえよー。

「どうすつかな~?」

考え方でいる

「あつ、あのゴーノ君!」

なのはが緊張しながら俺に聞いてきた。

「どした?」

「私の家に泊まらない?」

「えつ!」

「ほつ、ほらー!今日のお礼したいし、ゴーノ君ともひとつお話し、したいから(うう~恥ずかしいよ。でも、ゴーノ君ともひとつ一緒に居たいからって、無理言い過ぎたかな?)」

顔を真っ赤にして心の中で色々と考えている。

「あの、なの」「ちよつと待ちなまこ(つてね)ー...」「うあつー...」

俺はなのはに答えを言おうとしたら突然、一人が話しへ入ってきた。

後、俺はなのはの話を断りつとしていた。家族に迷惑かかるだろうし、何より女難が...。

「ゴーノは私の家で泊まるのよー!今日の事で色々聞きたいし、私を

からかっ た責任はとつて貰うからね！！（うわ～恥ずかしい事言つ
ちゃた。べつ別に深い意味はないんだからね！コーンが私の事をか
らかうから仕返し、したいだけなんだからね！）
顔を真っ赤にして心にいい聞かせるアリサであつた。

「私もコーン君にはうちに泊まつて欲しいな？今日の事もそうだけ
どレイシングハートについても知りたいし、何よりコーン君の事を
知りたいからね？（何で私、こんなに積極的にしかも大胆こと言つ
ちゃたんだろう？でも、やっぱりコーン君にはウチに来て欲しいな）
」

自分の変化に驚きながらも、目的を忘れないはずかであつた。

え、何この状況？俺は断ろうとしたのに、なんかお泊まりが決定み
たいな感じた。

「 「 「コーン（君）（君）……」 」

「はいっ！」

突然呼ばれ思わず、声を上げてしまった。

「 「 「とつちがいいのか（決めてよ）（決めなきこ）（決めてね
！…」 」

本当に俺にどうしようってんだよこの状況は、よおおおお！

心の中で叫ぶコーンであった。

『女難… 大当たりでしたねコーン。』

原作キャラとの邂逅（後書き）

反省会

「セ～く～しゃぢゃん、遊・び・ま・しょ～！」

「つおつ！標識持ってきてどうした！？」

「何なんだ、今回の話しさ！完全にフラグっぽいものを立ててたぞ
！――」

「良いではないか。あんな美少女に囮まれてんだから？

「そう言つ問題かよ！次回タイトルは【どうすんだよ俺！】だ！」

「毎度ながら無理やりすぎないか！

「ウルセエ！死ね！」

「うわっ！振り回すな！投げつけんな――ぎ―やああああ！

ひすんだよ俺ー（前書き）

相変わらず無茶苦茶ですが、どうせ。
お気に入り登録が20越えたのがすぐ嬉しかったです。

どうすんだよ俺！

誰か、助けて下さい！今、俺こと憑依者ユーノは最大な選択肢をしなければ、成らない状況にいます。

「ユーノ君、私に家に泊まろ？よ！」

「いいえ！私の家に泊まりなさいユーノ！」

「勿論私の家だよねユーノ君？」

どうすればいいんだ！

確かにその話しさ嬉しいが、何故一気に三人も同じ事、言つんだよ？
例えば、誰か一人を選んだら必ず一人が、悲しい反応するだろう
し何より嫌な予感しかしない！

考える俺！誰も悲しまない最高のハッピーエンドを……幻想殺しが入りました。

そして俺は答えを出した！

「みんなで、一緒に泊まるってのははどうだ？」

…これ以外何も思いつかねえ…。

あれつーよく考えれば、女難をさらにも悪化してるだけだ！

「誰の家に泊まるの？」

「うーん、この際だからなのはの家ね。」

「うん決定だね」

時既に遅し……。何の迷いもなく決めやがつた。

「じゃ、早速私の家に行こう」一ノ君

「ねつ、ねい！ 手ひつばんなよなのはー。」

俺はなのはにひっぱられながら歩き出し、後ろの一人もどこか羨ま

しそうに俺らを見ながら歩を出した。

「なあ、アリサにすずか。急に決めて大丈夫なのか？」色々と事情があるのでないかと心配になり質問した。

「大丈夫だ。河の問題も第二の問題も解決だ。

「私もだよ。何より明日から休日に入るから何の問題はないよ。」

てか!! 明日がこの木かなのかよ!! まします、謙な予感がしてきました。

「なのはも大丈夫なのか？急に泊まる事になつたんだぜ？」
そう、急な訪問に泊まると言うのだから、家族も困る筈だ。

「大丈夫だよユーノ君！みんなは、優しいからきっとユーノ君も受け入れてくれるよ」

何ていい笑顔で言つんだ。可愛いすぎだろ「

「あつヤベ… 言ひりやた。」

「冗談でいつたんなら怒るよ！」

顔を赤らめて怒ってきた。だが俺の返答は

「冗談で言うもんか！本当に可愛いかったぞなのは！」

「人々と面識った。

「ふえええ／＼＼＼！そ、そんなに思い切って言わなくても…＼＼＼。

「いや、本当に可愛いから、この際だからなのはにわか
つて欲しかったからさ。」

俺は微笑みながらそう言った。

「／＼／＼（ううう）。ユーノ君、恥ずかしすぎるよ。二人とも見てるのにー！」

たが
顔は嬉しそうなのはあつた

：やばー俺、す”い恥ずかしい」と言つちまつた！

一応自覚はある「一ノであつた。

なのはに謝りうとしたら

「「ゴー」（君）！」

ビクツ！

えつ！何事ですか。俺、一人には何もしてないのに何故か怒つて、るよう見えてるぞ！

「アンタから見て私はどう見える！」

「私もユーノ君から見てどう見えるかな？」

この流れは、さつきのなのはみたいに言わなければ、ならない流れになつてゐる。

…俺も結構恥ずかしいんだぞ／＼！

「アリサ！」

まずはアリサから

「その元気と強気の性格が俺にとつては、とても魅力的なんだ！」

「／＼／＼う、嘘じやないでしょうねえ！」

「嘘、偽りなんてない！本当に心からそう思つてる…」

「よろしい／＼。ユーノにしては上出来じやない／＼！（勢いで言つちやたけどすゞい恥ずかしい！べつ別に仕返しをしたかっただけなんだからね！）」

満更でもないアリサである。

何なんだよこれは！何の拷問だよ／＼！

「すずか！」

これで終わらせる！

「その独特的の雰囲気と心優しさひとつでも癒やされています…」

「続けてユーノ君／＼。」

「その優しさに触れられていると思つだけで、胸がいっぱいなんだ！」

「ありがとうユーノ君。とつても嬉しいよ／＼。（男の子にこんな事言われるなんて初めてだよ 今、とつても幸福だよ）」「…もうなんだよこれはよう／＼！

何でこんな夜に愛の告白しなきやならないんだよ！まだ、家にすら着いてないのにこんな調子で大丈夫なのかよ～。

『先が思いやられますね？』

レイ…お前わざと黙つてたら？そして狙つてやがたな！

一切味方がいないユーノであった。

「此処で待つてね！」

やつと着きました。

なのはは、今家族に許可を取りにいきました。
なのはの家つて喫茶店か何かか？

「みんな、大丈夫だつたよ 上がつて上がつて！」

本当に通るとは思わなかつた。

そして俺達は、翠屋、に入つていつた。

「君がユーノ君だね。娘とその友達を助けてくれてどうもありがとうございます。」

「いえいえ、偶然駆けつけただけですよ。」

「それでもだよ、本当にありがとうございます。」

今話しをしているのは、高町士郎さん。
なのはのお父さんです。

いやその前に

「魔法バラしたな、なのは？」

「うつ、『ごめんなさい…』。」

普通にバレてるようつだ。少しづつ、隠してくれよ。

「なのはを責めないで上げてユーノ君。この子、助けて貰つたことが相当嬉しかつたみたいなの。」

「やうだよ。あんなに嬉しそうに話してるのはは、初めて見たよ。」

「

今話した二人は、上からで、高町桃子さん、なのはのお母さんです。次に高町美由希さん、なのはの姉です。

「別に怒つてはいませんよ。ただ、信じてもらえないと思つて…。」

「そんな事はない。なのはが、必死になつて説明してくれたんだ。」

「俺は、ユーノの話を信じるよ。」

今のが高町恭也さん、なのはの兄です。

それにして優しい心が広い人達だな。

「さつ！長い話しさ終わりにしましょう？なのは達は、お風呂に入つてらつしゃい？」

桃子さんが仕切り始めました。

数時間後

あの後は大変でした。風呂がなのは達と一緒に入らされそうになつたり、士郎さんと桃子さんに、娘とはどんな関係なのかと聞かれたりで大変だった。美由希さんには、可愛いと頭を撫でられ、恭也さんは稽古をやらないかと言われる始末だ。

今、現在はなのはの部屋に俺を含めて4人いる。

本当は、恭也さんの部屋に行こうと思つたのだが、本人達の強い希望でこうなつた。

「ねえユーノ君？」
なのはが質問してきた。

「何だ？」

「私達で、ユーノ君のお手伝いできなかな？」

「えつ！」

急な話題だな…。

「私達なりに考えたのよね？何かユーノの手伝いが、出来ないかなつて？」

「うん。それがこの答えなんだよ。どうかな、ユーノ君？」

俺は真剣な顔で、答えを告げた。

「駄目だ…。」

「…………」「」

三人とも驚いている。俺が話を断わったことに、びっくりしているのではなく俺の雰囲気の変わりように驚いているようだ。

ふざけた様子など見せず真剣に語る。

「確かに手伝ってくれるのは、嬉しいさ。でも、これ以上巻き込みたくないんだ。」

「何より、怖い思いをするだらうし大怪我をする可能性だつてあるんだ。」

三人は俺の話を真剣に聞いて色々考へてるようだ。

「だから、その話しさは聞くことは、出来ない。」

俺のせいで、彼女達の日常を壊したくない。わざわざ危険に巻き込むことはないんだ。

そしてなのは達は答えを出した。

「 「 「 やつぱり手伝う（よ）（わよ）（ね）…」 「

本人達はさつきよりも“決意”のある雰囲気を出していった。

Sideなのは

「理由を言つてくれ。何でそこまで関わるひつとする?」

ユーノ君が真剣に聞いてきた。

私もよくわからない。何でこんなに真剣になっているのか。

私は運動音痴だし、特別頭もよくない“平凡”な小学生だ。

でも！

「私は関わったことを絶対にユーノ君のせいに何かしないの！自分が関わったなら自分で責任をとるの！」

今まで私なら絶対に出さない答え

「何の力もないのにか？」

まだユーノ君は納得してくれない。

「力以外にも何か出来る筈だよ！私はそれを見つけてユーノ君のお手伝いをするの！」

どこか何時も遠慮している私はいなかつた。初めてかもしれない、自分の“意志”に素直になれたのは。

Sideアリサ

なのはがあそこまで、眞つとは思つてなかつたわ。

「ユーノ！私も理由を言つてあげるわ…」

正直、今でも今日起つたことは信じられないでいる。

けど！

「UJのまま黙つて見て見ぬ振りなんて出来ないわ！」
私は無理難題を事を言つ。

「それは、ただのわがままだ！アリサは自分のわがまま一つで、危険に晒すきか？」

「うよ、確かに私のわがままよ。でもねえ！」

「私はそのわがままを貫き通すわ！もう決めたんだからね！」「…」
そう私は自分の言った事に“覚悟”を持つて言つているんだから何の迷いはないわ！

S i d e すずか

二人とも凄いね。私もそつするんだけどね？

「私の理由話すねユーノ君？」

最初は彼に近づきたかつただけだった。彼の優しさ、明るさがとても心地よかつたから。

だけど！

「誰かが傷ついている所なんて見たくないからだよ…」「
彼の心情を聞いた時、考えが変わりました。

「それと同時にすずかも傷つくぞ？肉体的にも精神的にもだ！」「…」
確かにそうだね。それで、自分の“体質”がバレるのも怖い。
「でも、私の心は揺るがないよ！それを含めて決断したんだからね
！」

私は“恐れない”よ。どんなに辛い出来事があつても乗り越えて見せる。ユーノ君のお陰で決断する事が出来たんだよ？

Side ゴー

予想外だった。こんなにも強い志があったなんて、話を聞いて身を引くと思つていた。

「最後にもう一度問うぞ？」

三人も真剣な眼差しで見た。

「自分の言った“信念”に嘘、偽りはないか！？」

そして答えは

「「「勿論（よ）（だよ）……」」」

「わかった！俺はお前達の事を認めよう！これからもよろしく頼むぞ！」

これで“綺麗”に終わる筈だったのだが

「じゃユーノ君。一緒に寝よ／＼！」
とんでもない」と言つてきやがつた。

「なのは、急にどうした？」

ヤバい、すっかり女難の事を忘れてた！

「まだユーノ君と一緒に居たいからダメ、かな？」
何ちょっと目、潤んでだよ！断りにくいだろうが！

「いやダメよ！ゴーは、私と寝なさい／＼！」

今度はアリサか！

「何でそなんだよ！？」

「アンタがなのはに何かするかもしないでしょー！だから、私が変わりに寝てあげるわ！」

「しねえよー! てか、意味わからんねえよー。」

ヤバいやばいー・ややこしい事になつてきましたぞー

「私もユーノ君と寝たいなー？いいでしょ？ユーノ君？」

やたら魅惑的に言わないでくれすずか!!

「普通は駄菴たる無理しなくていいんだぞ！」

更に注文までしてきた！

卷之三

るんだ！

『ご愁傷様です』
トーノ！

「お前今回、そろばつかだな！」

レイと語り込んでいふ

「さあ、ユーノ君！」

なのはが言い

和辯の口たり

「誰か一人を

すずかも繋いで

「「「選（ひなさ）（んでね）…」」」

また「」の展開かよおあおおお！

『 もはや呪いの域ですね。ユーノの女難は…。』

そして俺は決める事が出来ず、三人と寝ました。

優柔不断とか言わないでくれよー女子と寝れるのだけでも、結構恥ずかしいんだからな！

こつして一日がやっと過ぎていった。

「あつーなのは達の“力”について説明するの忘れてた…。まついつか、どうせ明日休みだから、その時に説明すれば。」

そして今度こそ、ユーノは眠りについた。

ひすんだよ俺ー（後書き）

反省会

「…………。」

「疲れきつてるな。

「誰のせいだ！あそこは、シリアスなまま終わらせてー。」

「いや、面白みが…

「貴様舐めてるだろ！次回タイトルは【何が起こるかわからない】

だぜ！」

「言つておくけどまだまだ増えるからな。

「その妄想をぶち殺す！！」

「右ストレーニヤリぎやああああ！

「また、次回。」

何が起るかわからない（前書き）

不安で、ならない出来です。

何が起じるかわからない

おはよつゝやれいます。憑依者ユーノです。俺は、朝起きて土郎さん達の道場にいます。

……なのは達はまだ寝ています。抜け出しあきました。流石に言動を控えようと修行をしにきました。

俺は、大きく足を開き左足を前に出し、左腕を曲げて握り拳を作り右手を開いて前に出す構えを取った。

「ハツ！」

まずは右手で攻撃を払うようなイメージで動かし、左ストレートを喰らわせる。

そのまま、大勢を低くしながら足払いをし、そのまま背中にナックルをするように拳を突き上げた。

パチパチ……。

「すごいな、ユーノその年でそこまで動けるとはな。」

恭也さんが入ってきた。

「あつ！すみません恭也さん。勝手に道場を使つてしまつて……」

「いや、気にするな。それよりユーノ俺と模擬戦をしないか？」

恭也さんはそう言い俺に木刀を渡してきた。向こう小太刀の一刀流だ。……やる気まんじやん。

「分かりました。やりましょう。」

俺は木刀を構えた。

「ああ、後その敬語止めたりどつだ？多分みんなそう思つてゐるぞ。」

恭也さんも構えた。

「……わかつたぜ。なら遠慮なく言わせて貰つぜー！」

そして俺は戦う前にこう言った

「我が名はコーカ・スクライア！使う流波は【時雨蒼燕流】！最初に言つておくぜ、この流波は“最強無敵、完全無欠だ”！」

俺が宣言した後に恭也さんも

「我が名は高町恭也！流波は【小太刀二刀流御神流】！ならその流波、俺が打ち破つてみせようー！」

こちら宣言をし

「「いや、尋常に推して参るー。」

バチャイイイイン！

“剣”の勝負が始まった！

「ウォツリヤー！」

「甘いぞ！」

俺は木刀を斜め横に攻撃をし、左で止められた。相手は右の小太刀で俺を攻撃を仕掛けてくるが、俺は後ろに後退する。

そして追撃していく恭也さんの攻撃をなんとか受け流す！

一度お互に距離を取る

「なかなかやるな、コーカ？」

「恭也さんこそ凄いぜー！この戦い楽しくなりそつだぜー！」

「俺も同じ事を考えていた！」

バチバチバチイイイー！再び剣の弾きあいが始まつた！

「御神流“神速”！」急に恭也さんが消えたーいや、見えていない

だけで確実にいる落ち着け！

「これで終わりだユーノ！」

俺の死角から攻撃してきた。このままおわれるかよ！

「時雨蒼燕流、守式四の型・【五十嵐雨】！」

俺は無数にくる斬撃を相手の呼吸に合わせて避けきった。

「……」

恭也さんは、驚き距離を取らなければならぬ。

逃がすか！

「守式四の型から攻式一の型…」

俺は木刀を両手に構えて

「【車軸の雨】！」

突進するように相手を貫くつもりとする…

「（速い突きだ！避けられるか…）」

恭也さんは、避けようとするが左側に当たりそうになり、ガードを入れる。

「クツ…」

俺は横を通り過ぎ、向こうはバランスを崩したチャンスだ！

俺は木刀を離し一気に後ろを振り向き

「攻式三の型・【遣らずの雨】」

相手に向けて木刀を蹴り飛ばした。

「何つ！クツ！」

木刀は左側にあたり小太刀が落ちた。

そして俺の木刀は空中でクルクル回り、それを瞬時に左手でキャッチをし相手に向かい走り出した。

「（今はガードをして大勢を立て直す！）」

ガードか？だが甘い！

「時雨蒼燕流、攻式・五の型！」

俺は懐に入り込み中斬りを放つ

「（ガード！）」

「【五月雨】！」

ドゴン！

「グアアア！」

恭也さんは左に吹き飛んだ。

「何をしたんだユーノ！」

俺の斬撃を腹に喰らい抑えながら聞いてきた。

「さっきのは、左に持っていた木刀を右手に素早く入れ替えたんだぜ。」

「あの一瞬でか！」

俺が右手に木刀を持つてているのがその証拠だ。

「あつ！恭也さん大丈夫か！つい夢中になっちゃった。」

「大丈夫だよ。それよりユーノは強いな。負けてしまったよ。」

「なら、また今度やるうぜ！また戦つてみたいしね！」

「そうだな、またやるうコーカー！」

俺達は、笑顔で握手をして終わりを告げた。

「凄いなお前達…。」

士郎さんとなのは達がその場にいた。

「あれつ？いつから居たんですか？」

「実は最初からこつそり見てたんだよ。後、敬語はなしね。」

また、直された。

「ユーノ君。凄かつたよ！」

「おう、ありがとなのは。」

「ユーノ君つて格闘も強いんだね？」

「だろ？すずか。何せ鍛えてますからー。」

「魔法以外何もないかと思つたわよ？」

力チン！

「んだとアリサ！何でそう評価出来んだよ！」

「だつて顔が女顔なうえに見た目も強うそうに見えないからよ！」

「あつ！人が気にしてる事を堂々言いやがったな！このバーニング娘が！」

「バーニングスよ！人の名字を勝手に変えるなー！てか、アンタ昨日の性格と全然違うんだけど…」

「遠慮を止めただけだ！」

胸を張つて言つ！

「少しば、自重をしなさい！」

「遠慮がない今の俺にとつてはそんなもの皆無だ！」

「反省しなさああい！」

アリサが俺に向けて殴りかかってきた。

「だが断る！」

バシン！と俺は拳を受け止めた。

「私の拳を受け止めるなんて上等じゃなー。覚悟しなやこー。」
「Ha！来いよアリサ！返り討ちにしてやるぜー。」

第2ラウンドが始まろうとしたが

「ユーノ君、落ち着いて！」
すずかが、俺の事を止めに入り
「アリサちゃんも落ち着いてなの！」
なのは、アリサを止めに入った。
だが！

「どいでくれすずか！勝負を申し込まれた以上、戦うぜー。」
「いや、だから落ち着いてよユーノ君！男のタイムン勝負じゃない
んだからー。」

「気にするなーもはや、関係なしだー。」
「いや、少しばれてよー。」

一方アリサ達は…。

「どきなさいなのはーあの馬鹿に誰に喧嘩を売った事をわかれせて
やるわー。」
「じつかつて言つと売つたのは、アリサちゃんのほうなのー。」
「つるをこうひるをこうひるといー。アイツに私の力を思い知らせてやる
んだからー。」
「逃げてユーノ君ーアリサちゃん本気だよー。」

朝からテンションの高い4人組である。

一方、大人二人は…。

「みんな仲良しだね。」

「そうですね、父さん。」

微笑んで見守っていた。

てか止めてやれよ。

「ユウウウウノオオオオ！」

「アリサアアアア！」

「やめてえええ！」

何気に楽しいと思っています。

数時間後

俺達はあの後すぐに家に戻り、朝食を取った。
アリサとの勝負は？

いい加減、大人に捕まりやめました。

「という事で始めたいと思います！」

「まず、状況を説明しなさい！」

「いだつ！」

ええ～今現在なのは達を外に連れ出して
どんなに壊しても後で元通りになる結界を張り、人は誰もいない状
態です。ちなみに森みたいなところだ。

「何を始めるのユーノ君？」

俺はアリサに殴られた頭をさすりながら答えた
「修行だよ。お前らの“力”的修行だ！」
「えつ？ 私達ユーノ君みたいに魔法使えるの？」
なのはが質問してきた。

「使えるのは、なのはだけで後の一人は違うんだよな～。」

「じゃ私達は何が使えるのよ！」

「教えてユーノ君？」

よし説明しますか。

「まず、すずか。」

「うん。」

「風の能力だ！」

「風？ どんな能力なの？」

「例えるなら、カマイタチを作つたり、風で周囲のものや人を動かすことも出来るし、気配もわかる。後は本人の応用だな～。」

「色々と便利だね。でも、どうやって使うの？」

「ああ、これを使うんだよ。」

俺はいつの間にか黒いブレスレットを持っていた。

「どこから出したの？」

「企業秘密だ。」

いづれは、語る。

「付けたよ。」

ブレスレットを右腕にはめたよつだ。

「風切発動って言ってみ？」

「うん？ 風切発動！ うわあ！」

すずかの周りに風が吹く。そして晴れた先にいたのは、黒いズボンを穿き赤いTシャツの上に紫色のコートを羽織り、右手に蒼い鞘に収まつた“刀”を持つているすずかがいた。

「えつ！ なにこれ？！」

すずかはかなり驚いてようだ。

「カッコイイのすずかちゃん！」

「一体どうなつてんのよ…」

二人も同じなようだ。

説明はまた後でだ。

「次はアリサだ。」

「待つてたわよ。どんな能力なのよ…」

「死ぬ気の炎だ！」

「聞こえ的に危なく感じるけど、どんな能力なわけ？」

「この指輪をはめてくれ。」

俺はあるの“指輪”を取り出した。

「なんで、指輪なのよ！」

「文句を言うな、とつととはめてくれ。」

「わかったわよ！（勘違いするでしょうがあのバカ！）」

色々考えていたアリサであった。

「で、どうすればいいわけ？」

準備が出来たみたいなので、俺は銃をアリサに構えた。

「はっ！ ちょ！ 何やつ（パン！）」

俺はアリサを撃つた。そして倒れた。

「…………何やつてゐのぉおおー！」

二人が驚いた瞬間。

「！」のバカユウウウノオオオオ！いきなり何すんのよ！」
さつき撃たれ筈のアリサが普通に立っていた。

そしてアリサの服装はギルガメッシュのライダージャケットをオレンジ色にしたような感じになっていた。

勿論、両手には【×グローブ】が装備されており、額に炎はついてます。

そう何を隠そあれば、【ボンゴレリング】なのだ。俺が出したやつは、指輪と死ぬ氣弾だけで、なんとかなるのだ。

ちなみにすずかのは、俺のオリジナルだから、まだ説明は出来ません。

「悪い悪い、必要なことだつたからさ？」
「なら撃つ前になんかいなさいよね！」
「別に撃つたなくてもなれる方法あつたんだけどなー！」
「なら、そっちにしなさいよねー！」
「ガハッ！」

飛び蹴りを喰らいました。

「最後になのはー！」
「はい！」
「お前には、レイを託す。」「えつ！相棒なんぢやないの！」「なのはとの相性が凄くいいんだ。きっと十分に力を使えるぜー！」

これは、本当だ。なのはは、魔力だけは凄いしレイとの相性も本当にいいのだ！

「じゃ、早速私もアリサちゃん達みたいに…。」

「あっ！それ無理。」

「何で？何か問題あるの…。」

問題以前の前に…。

「レイの事を家に置いてきた事、今思い出したからさ。」

「えええええ！」

心底びっくりして大声をあげるなのはあつた。

この後、無事にレイを持ってきて修行を始めた。

何が起ころるかわからない（後書き）

反省会

「最近大丈夫か？」

「何が？」

「無理に投稿し過ぎ何じゃないのか？」

「確かにな。

「今回は、言わないでやる。じっくり考えよう。」

「ありがとうございます。」

「また次回！」

修行あるのみだ！（前書き）

自分のオリジナルが入っていますが、どうぞよろしくお願いします。

修行あるのみだ！

突然ですが、俺憑依者ユーノは言いたいことがあります。修行つて燃えませんか！！俺もついつい、修行時代に燃えていたんですね。何に燃えるのかと言つと

「物理的に燃やされそうになつてゐるからだ！」

俺は、珍しくスクライア一族の服を身に纏つてゐるのだが、（ボボボボ！）俺のマントが燃えてるんだよ！

「ユーノ！早く炎消しなさいよ…」

「元を辿れば、お前のせいだからな！」

そういうの、バーニングなやつなせいだ。

理由を述べると

実はアリサに渡したボンゴレリングは、一つの炎だけではなく、複数の炎が使えるように改造して貰つた。一番適合がよかつたのは、大空と嵐であるボス一人のやつに近かつたのだ。

そこで俺は、その二つの炎の修行に入ったのだ。

だが！

「何で拳に灯しんてる炎が振るつただけで、飛ぶんだよ！しかも俺に、オマケで嵐かよ！」

危うくバラバラ死体になるところだったぜ。

「何よ！偶然が起きただけじゃない、別にわざとやつたワケじゃな

いんだから！」

「つたりめえだ！わざとだつたら間違いなく、殺意があんだろ？が
！」

「ある意味あるかも知れないわよ？」

「サラリと動機を認めんじゃねえよ！」

アリサのスタイルは基本、近接戦闘だ。

後、Xグローブも改造して銃に変える事も出来るので、遠距離も回
れるようになつていて。

腕は悪くないんだが、やっぱり未熟な所があるようだ。

そこは模擬戦と実戦で、何とかするか。

「アリサ、今から俺と模擬戦な。」

善は急げ早速やって行きますか

「別にいいわよ？私がどれ位強く成ったか、その身に焼き付けなさ
い！」

……最後のあたり決め台詞っぽいぞ。

そして今、俺は空中でアリサに向かいあつていて。

「来な！A young lady（お嬢さん）…」

「Don't repent（後悔しないでよ）…」

バン！

アリサの先制攻撃で始まつた！

「はああああ！」

アリサは、俺の胴体に両掛けで攻撃してくるが、俺は虫を払つよつ

に手で横に払い体勢を低くし、右手を開き攻撃しようとしたが

「！！（バン！）」

攻撃してきた反対の手を俺に突き出し、炎を噴射して後退した。やるな…。

「何だ？今ので終わると思つたぞ？」

「伊達にアンタに鍛えられていないわよ？アンタ教えかた上手いからね。」

そうかなれば…！

「これは、どうだ！」

俺は瞬時に相手の顔を両掛けで蹴りを放つた！

「！！」

アリサは、その場から逃げられず、体を後ろに倒し避けるが、俺はそのまま足を振り下ろした。

「うわっ！..」

アリサは瞬時に両手で受け止めるが、凄い勢いで地面に激突しそうになる。

体勢を変えられないので、右腕を前に出し左腕を後ろに出して炎を噴射して降下を止めた。

「女の子に顔目掛けで攻撃する普通？」軽口を叩いてきた。

「俺の教えなんだろ？なら、防げて当然だろ？」
皮肉を言つて返してやつた。

「確かにそう、ねえ！」

ダダダダダアン！

×グローブを銃に変えて撃つてきやがった！

「チツ！」

銃の弾を紙一重で避けて行き、アリサに向かつて行く。

「いい加減あたりなさい！」

ダダダダダアン！つとまた撃つてきている。

「無理な注文だ！」

俺はまた弾を避け、アリサの懷に入り込んだ。
相手は銃だが、こんな瞬時に狙えまい。

「これで、終わりだ！」

俺は右ストレートを放った。

だが……。

ガシッ！

「何？」

アリサの左手だけが、グローブに戻っているが右は銃だ。

ピト…

頭に銃を突きつけられ

「私の勝ちね！」

引き金を引こうとする。

確かにお前の戦術は、完璧だつたよ……でも、“相手が悪かった”な！

俺は引き金を引かれると同時に

ダアン！
バツ！

銃の弾が発射つと同時に避けた。

「えつ！」

驚いている暇はないぞアリサ？

俺は、左腕で攻撃する。

「しまつ！」

アリサは目を瞑り攻撃を待つたが、

「はい、終了だ。」

その攻撃は来ず、終わりを告げられた。

はあ～結構疲れたな～。

「何であそこで避けられんのよ！普通当たるでしちゃうが……」

アリサは、疲れ切ったのか座りながら俺に文句をはいた。

「まだまだ、修行が足りないだけだろ？」

「ヴウ～。悔しいわ！」

全く膨れちゃて

「確實に強くなっているんだ。そんなに拗ねんなよ？」

「べつ別に拗ねてなんかいないわよ！」

「そつか、なら素直に喜んでくれよ？」

「ムツ～。わかつたわよ！」

「よろしい

そこから數十分話した。

「んじゃ、俺は他、回るから体をほぐしておけよ。」

「わかつてるわよ。てかよく動けるわね？」

「鍛えますから（シユ）！」

右手で敬礼。ぽつりものやつてその場を去了た。

説明がまだだつたが、他の二人は俺が与えた修行をやつてゐる筈だ。

「すずかの所に行くか…。」

次の目的地に向かつた。

俺は一km離れた所からすずかの修行を見ている。

すずかは、刀を右手に持ち鞘を左手に持つてゐる。

周りにはS字の風の刃が5本位浮いてゐる。

「フツ！」

すずかは、鞘を振るい、風の刃もそれに合わせて周りの木に飛んで行く！

ざつざつざつざつざつ！

計5本の木の元辺りを切り裂き、宙に浮いた。

そしてすずかは、刀を上に構えて

「ヤアアアアア！」

刀を木に向かつて振るうと同時に刀から真空の刃が放たれた。
ぱつぱつぱつぱつぱつ！

木はバラバラに切り刻まれ、落ちていくが

「ハツ！」鞘をまた振るうと

ヒュウーーー！

風が吹き、木を綺麗に重ねるように並べた。

「どうやった、使いこなしていいよ！」

あの刀、“風月”^{フウゲツ}は強力な風の武器を創り出すことが出来る刀だ。次に鞘の“風来”^{フウライ}は風を生み出し、自在に操る事も出来れば、風の流れで相手の行動パターンもわかる。

「（コーノ君、今のはどんな感じだった？）」

「！」

突然すずかが念話で話しかけてきた。

ちなみにアリサも使えます。

俺は転移ですすかに近づき質問した。

「どうやってわかった？ 気配は完璧に消したはずだが？」

「気配は消しても、風が私に教えてくれるんだよ？」

これは驚いた。どうやら風来を使って風の流れを読み、俺がいる事に気づいたようだ。

「正直、素晴らしいことしか言つようがなによ。あそこまで、使いこなせるんだからな。」

「ありがとうコーノ君！でも、コーノ君の教えるおかげだよ。」

「そりやどうもだな。」

そして俺達は、笑い合いながら数十分話し続けた。

「あつ！ コーノ君は何をしてここに来たのか聞いてなかつたね？」

突然話題を変えた。

「すずかと模擬戦をやってみよつかなつと思つたからさ。」

そして俺は答えを言った。

「かまわないよ？じゃあ、始めようゴーノ君。風は無限の可能性を秘めているから、気おつけてね」
なんか格好いいぞすずか。

「さあ、来いすずか！」

俺は【物干し竿】を取り出し、構えた。

「いくよゴーノ君！」

すずかは再び構えをとり、第2の戦いが始まった。

「ヤアアア！」

「フツ！」

すずかは、真正面から突こんできたので、俺は動かず受け止めた

ガキン、ギギギギ！

刀がぶつかり合い、金属音が鳴り響く。

しばらく睨み合っていると

ガキン！とお互い刀を弾き合い距離を取った。

それと同時にすずかは風刃で、武器を創つた。

「風刃！」

さつを見たS字の風の刃、今度は十本ありやがる！

「行つて！」

刃は回りながら俺に向かつってきた。

「ハツ！セヤツ！」

俺はその刃を切り落としていくが、攻撃が5本で急に止まつた。それにはすずかも、いつの間にか姿を消した！

ブンブンブンブンーーと俺を囲むように残りの5本が迫ってきた。

俺は刀を横に構え、

「はあああ！」

切り落としていくと

「隙あり！」

突然すずかが、現れ隙が出来た俺に風でスピードを上げて攻撃してきた。

「ハツ！」

「キヤツ！」

俺は直ぐに体制を立て直し、逆に弾き飛ばした。

「へえー？なかなかやるなすずか！」

「ユーノ君こそ、凄いよーあの攻撃を防いじやたからね。」

お互に褒め合つ俺達

今度は俺が仕掛ける！いや、終わらせん！

「すずかーお前が風を読み、避けれるなら俺が出すこの、技、を避けてみろー！」

「うん！絶対に避けてみせるよー！」

俺は刀を両手で持ち、顔の隣に構え刀身を相手に向ける。

すずかもガードの体制に入った。

「秘剣…」

腕を振り絞り

【つばめ返し】 - - - 「【つばめ返し】 - - -

同時に“三撃”の攻撃を一度に飛ばした。

「ひどいよユーノ君！あんな攻撃避けられないよ！」

「悪い、調子に乗りすぎました。」

その後、すずかは避ける事が出来ず、当たりK.O.した。

「もう、少しは手加減してよ。」

機嫌を悪くしてしまった。

「すまん、すずか。」

何を言つて言いのかわからないので、謝り続ける俺であった。

とりあえず、今度すずかの家に遊びに行く約束をし、機嫌が直り、俺はその場を去った。

最後になのはの修行場に向かつた。

なのはには、魔法と体力を鍛えるトレーニングを「与えた。

魔法は問題ないのだが、体力が無過ぎるので、鍛えられるメニューを渡した。

考え込んでる内に田舎地につき、なのはを発見した。

休憩中なのが地面に寝転がっている。

相当頑張つたみたいだな…。

「なのは、大丈夫か？」

俺はとりあえずなのはに声を掛けた。

「えつ！ コーノ君。 いつの間に来てたの？」

なのはは、俺が来た事に驚き上半身を起こした。

「今、さつきだ。 それより、頑張ってるみたいだな？」

周りの木がなくなっていたり、地面にクレーターみたいのがあるのがそれを伝えている。

「勿論だよ！ 魔法も体力の方もコーノ君の説明のおかげで、凄く伸びがいいって言える位だよ！」

また俺の説明か…。

「そんなに俺の説明は凄いのか？」

「うん なんかコーノ君に教えて貢っているとまだまだ強くなれる実感がわかるんだよ！」

「なんかわかんないけどありがとう。」

素直に嬉しいです。

ちなみにアリサとすずかも同じ考え方です。

「それよりコーノ君は、何をしにここに来たの？」

「模擬戦をしようと思つたんだけど今日は、止めておこう。」

「えつ！ なんで！ 私まだまだ行けるよ…」

確かにに行けそうだが

「焦りは禁物、無理はせざだ。 なのは、他の二人より練習を頑張つていたから、その分疲れてるだろ？だから、無しだ。」

「ムウ～。」

頬を膨らまして、自分は納得いかないとアピールしている。

はあ～仕方ない。 出来るだけ無理はさせたくないんだかな。

「なら、完成した魔法を見せてくれ。それ位は許す。」

「！－うん！見ててねユーノ君！私の全力全開を！」

やつぱり、止めておけば良かつたつと後悔しました。

なのは、レイを両手で持ち前に向けて構え、魔力を溜め魔法を放つた。

「ディバインバスター！」

桜色の砲撃が木を呑み込んだ。

悪くない威力だ。狙いもいいな…。

今度は、上に構えながら砲撃を放ちながら

「ディバインブレード！」

振り下ろしながらの攻撃だ。

考えたな…。ただ狙い撃つだけではなく、少しの工夫だけで近接攻撃に変えた。

「どうだったユーノ君？」

なのはが結果を聞いてきた。

「なかなかいいぜ。ただ狙い撃つだけのスタイルではなく近接の時の考え方を出したのも凄いぜ！」

普通の魔導士なら自分の得意な魔法だけしか使つてこないが、それでは弱点になってしまつ。

そして元々なのはは、遠距離型のスタイルなのだが、なのははそれだけで満足せずに苦手な近接戦闘の練習もしているようだ。

体力上げのメニューを入れてなかつたら気がつかなかつたな。

「ありがとうゴーノ君！それとゴーノ君のおかげで、運動が楽しく思えるようになったの」

「へえ～。始めの頃の言葉とは思えない言葉だな？」

皮肉めいた言葉で言つてやつた。

「ウウ～。意地悪な事言わないでほしいの…」

そう言い類を膨らました。

やれやれ、言い過ぎたか？

「悪いなのは、素直にお前が感謝してくれたから照れだけなんだよ？」

やつ言い俺は、さりげなくなのはの頭を撫でてやつた。

これをやれば、機嫌を直してくれるとどうかの“正義の味方”も言つていたので実行した。

「あ～……うん。そういう事ならいいんだよ（なんか心地よい感じがする感覺だよ）。」

どうやら効果は抜群のようだ。顔を赤くして大人しくなつた。

――――――――――

俺達はその後、アリサやすずか達と合流をして家に戻つてゐる所だ。

「ゴーノ！」

突然、後ろでなのは達と話していたアリサが俺に怒鳴つてきた。

「何だよ？騒々しい。」

「アンタ、なのはやすずかには何か約束やご褒美を与えたのに、私には何もないワケ！」

あの二人話したな…。この流れは自分には何もないのかという振り

だな……。

「俺の出来る範囲で頼む。」

いい訳は見苦しいので、即答で答えた。

「簡単なことよ？私を“おぶりなさい”！」

久しぶりに女難がキタ————。

「何でだよ！もうちよと控えめなのねえのかよ！」

「うるせーこいつるさーこいつるせい！そんなんのは達と比べたら刺激が無さ過ぎんのよ！」

「勝負じゃねえんだから張り合つくなよ！」

そんな話しをしながら俺達は家に帰つて行つた。

余談だが、あの後の帰りにジュエルシードの反応が三つ現れたのが、三人が瞬時に現場に向かつた。

えっ？俺は何してるかって？ここは、私達に任せと言われ、今広範囲の結果を張つていました。

結果は、怪我もなく三人とも余裕で回収して帰つてきた。

そして再び帰ろうと

したら突然アリサが俺の背中に抱きついて俺は慌てて抑えた。

「疲れたからおぶりなさい？」

やたら、笑顔で言つてきた。まだ、根に持つてやがたな。

仕方がないので、承諾したら今度はなのは達が納得いかないと
てきて口論になつた。

結局俺は、アリサをおぶつて帰つているが、後ろの一人は羨まし
そうに睨んでしアリサはアリサで勝ち誇つたような顔をしていた。

いつも増して女難が悪いような気がする…。これから大丈夫かよ
本当に…。

不安を抱きながら帰るユーノであつた。

修行あるのみだ！（後書き）

反省会

「相変わらず俺はこんなめに…。」

「別にいいだろ。」

「これ以上増えないよな絶対に！」

「それはない！次回タイトルは【時間の流れは早い！】だ！」

「キッパリ言いやがた！てか、それ俺の台詞だ！」

「また次回をお楽しみに～。」

時間の流れは早い！（前書き）

良ければ、幸いです。

時間の流れは早い！

地球に来て三日になる憑依者ユーノです。ジユエルシーードも今は、四個も集まり順調なのですが、現在面倒くさい事になっています。

「服を買いに行こうユーノ君？」

なのはが、みんなと朝食を取つてる時に話題を出した。

ちなみにアリサとすずかは、自分の家に帰っています。

驚いた事に一人とも大きな家のお嬢様だった事も知った。

……何故かすずかの家の庭には、罠、が沢山あつたが何かあるのか？

その考えは、また今度にしよう。

後、俺は正式的に高町家に居候する事になりました。

「何で？」

「だつてユーノ君、同じ服しかないから困つてるんじゃないかと思つて……」

「なるほど。」

確かに俺は、服が一着しかないそれを、俺は色々とコネを使って洗い、乾かして毎日着ていたのだ。

気にするのも当たり前か……。

「ありがとなのは。心配してくれて。」「純粋に心配してくれたなのはに感謝した。

「「ううん 気にしないでよコーノ君。」
笑顔が眩しいぜ。」

「なら、一人で服を買いに行つてくる?」

桃子さんが突然、そんな事を言つてきた。

「確かにコーノ君は、同じ服しか着ていなかから、この際だから買つてきたらどうだい?」

士郎さんも同じ事を言つてきた。

「いいのか? 邪魔になつたりしないのか?」

「何を心配してるコーノ? お前は居候の身だが、今は、家族、と同じなんだ。遠慮するな。」

恭也さん…、発言がイケメンすぎるぜー…

「そうだよコーノ。私達は、家族、と同じだから、いっぱい甘えていいんだよ?」

美由希さんもありがとうござります。

本当に優しいなこの家族は…。

俺には、“本当の家族”がいなかつたけど今は、スクライアのみんなもいるから別にかまわない。

「わかつた。本日俺は、服を買ってくるぜー!」
ここに宣言をした!

数時間後

「早く行こうよコーノ君!」

「元気だな〜、なのは。」

俺達一人は、服を買いに行つてゐる所だ。

他のみんなは、それぞれ用事があるので、一人きつりなわけだ。

「だつてユーノ君と一人だけで、出掛けらるのが嬉しいんだもん
確かに一人だけになるのは珍しいな、基本四人で行動してたからな。」

「そつか。なら俺もなのはと一緒に出掛けで嬉しいぜ！」

「うん ありがとうユーノ君！」

俺達はそんな会話をしながら向かつていた。

客観的に見れば、デートをしていくように見えたそうだ。

さあ、着いたぜ！

「うお～デカいな～。」

プラト5みたいな所だな～。

「早速行こうよユーノ君！」

「おう！後、離れないように手を繋ご～ぜ！」

俺は左手を出した。

「うん 手を繋ごうユーノ君～（ユーノ君の手やっぱり暖かくて心地いいな～。）」

しつかり左手を握るのはであった。

「ユーノ君つて夏服が好きなんだね？」今、俺達は半袖や半ズボン
があるコーナーにいる。

「ああ！動きやすいし、俺ラフな格好が好きだからさー。ちなみに今の俺の服もそんな感じだ。

「へえ～そうなんだ（うう～よく見れば、コーカー君私達より肌が白いのー。）」

そうコーカーは、女の子達よりも綺麗な白い肌をしているのだ。本人は何も氣づいていません。

「どうしたなのは？考え方か？」

「ううん。何でもないよコーカー君ー。」

大声で返してきた。

やっぱり何か考えてたのか？

「とりあえず、買いたい物も決まったから会計済ませようぜ？」

「うん。 そうするの！」

俺達はレジに向かっていた。

俺達は会計済ませた後、店の中で飲食店があったので、そこで休憩している。

服は、五着買いました。全部、夏服です。

「そろそろ昼だから、何か食べて行くか？」

「そうしようコーカー君」

俺達は席に座り、テーブルにあったメニューを読み、注文をしようとしたら突然、

キ————ン

ジユノルシードの反応が出た！しかも店の中からだ！

おいおい、普通夜に反応を起こすんじゃないのかよ！

「ユーノ君！」

「わかつてゐる！」

考えは後だ。今は、封印がさきだ！

俺は結界を張り人が居なくなつた。勿論、物を壊しても後で直る結界だ。

「レイジングハート、Set Up！」

なのはは、白いバリアジャケットを展開して準備万端なようだ。

俺は両手に黒い銃と銀の銃「エボニー＆アイボリー」を取り出してクルクル回しながら構えを取つた。

「なのは！店の中じゃ下手に飛べないから走るぞ！」

前までのなのはだつたら絶対に承諾しない事だが

「問題ないよユーノ君！」

笑顔で、大丈夫だと言つてきた。

修行の成果が出てる証拠だな。

「んじや、行くか！」

「うん！」

俺達は現場に走つて向かつた。

場所に着いて見れば、大量の「マネキン」達が動いていた。

「ユーノ君、あれマネキンだよね？」

「間違ひなくマネキンだ。」

頼によつてマネキンかよ！てか、動くな！ホラーみたいになつてるぞ！

「何か怖いよ～ ゴーノ君！」

ほら！ここに怖がつて怯えて抱きついている女の子がいるんだぞ！

「大丈夫だなのは…割り切れ！」

「そこは、“俺が付いてる”とか“守つてやる”じゃないの…？」

「人は時に恐怖に挑まないと強くなれないんだ！」

「格好よく、まとめないでよー！」

なんて会話してると

ジジジジジジジジジジとマネキン達が迫つてきた！

「「キタ━━━！」」

本当にコワッ！無表情だから余計不気味だし、大量に来ると迫力がある。

「「散開！」」

俺達はそれ逆に跳んだ。

Sideなのは

うう～怖いの！私の周りには、十体位のマネキンがいるの…。
早く終わらせてゴーノ君とお昼を食べるの…。

二体が私の前に迫つてきた！私は狙いを定め

「ディバインバスター！」

一気に二体を仕留めたの！

次に私を囲むようにマネキン達が五体も迫つてきた！

狙い撃ちしてゐ暇はないね！

なのはは、突然クルクル回り出し、レイジングハートを横に構えて魔力を込めていく。

「ディバイントルネード！」

そして砲撃を放ち、マネキン達は吹き飛ばされた。

その技はなのはが、多数の敵と戦う時に考えた技である。

残りの三体が後退していく、逃がさないの！

「ディバインシューター！」

五発の魔力弾を作り出した。

「いけえ～！」

その魔力弾は見事にあたりマネキン達を倒した。

「ふう～。なんとかなったの。でも、こんな体験は一度としたくないの！」

そう言つと逃げるようにコーノの所に向かつた。

S i d e ユーノ

派手にやつてるな～なのはのやつ、俺もそういうがな！

「T h i s P u p p e t s h o w g e t t i n g c r a z y ! （イカれた人形劇のはじまりか！）」

「L e t ' s r o c k ! （派手にいくぜ～）」

俺の周囲には、二十体以上のマネキンがいる。

俺はまず一休目で近づき、もう二休目がいる方に蹴り飛ばし、銃を撃つた。

ダッダッダアッン！

ぶつかると同時に蜂の巣にしてやつたぜー。

次にマネキン達が六体が迫ってきたので、俺はその場を動かず、銃だけを構えた。

ダッダッダアッン、ダッダッダアッンとあらゆる方向に銃で撃っているが、俺は一步動いていない。
敵が来る感覺だけで、俺は撃つていいのだ。

今度は、向こうから仕掛けてきたが、俺は余裕でかわし、相手の頭に乗り空を跳んだ。

そこから、逆立ちの状態から回転しながら撃つ【Rai n Sto r】を放った。

「ヒュ――！」

ダッダッダッダアッン！

計十体のマネキン共を倒した。

「ハア！ガツツが足んねえな！」

俺は着地と同時に今葉を吐き捨てた。

離れた所によろよろになつた最後の一體がいる。びつやひじつぢの本体のようだ。ジュエルシードがある。

俺は両手で銃をクルクル回して狙いを定めた。

「JackPot！（大当たりだ！）」

銃声が鳴り響き、終わりを向かえた。

「何でジコホールシーーーーはマネキンに反応したのかな?」

俺達は、さつきの事件が終わり、昼食も取つたので、帰宅途中だ。

「さあな、マネキンにも願いがあつたんじゃねえか?」「願い? 例えば、どんな?」

「自分達も色々な服を着て歩き回りたいっていつ願いだよ。」
「さうとただ、着せられるだけではなく、自分達もその服で歩き回つてみたいという願いを…。」

「マネキンにも意志があつたて事?」「

「そうだ。どんなものにも、意志は必ずある。無いモノなんて無いんだよ。」

「じゃあ、私達悪い事しちゃつたのかな?」

その質問に俺は

「それはない。」

キッパリと否定した。

「なんで? マネキン達はただ動きたかっただけなのに!」

「結果はどうあれ、アイツらは俺達を襲つてきた。結局、願いは歪んだ形で終わつたんだ…。」

突然なのはが涙を一粒流した。

「私、何も考えてなかつた! ただ、相手が悪いだけなんだと勝手に決め付けて、相手の事を知ろうなんて考えていなかつた!」
まだ泣き出すのは…。

「私、最低だよ…。相手の気持ちを考えないで、相手の事を倒した。」

まるで“悪魔”だよ…」

涙を流すなのは…。

「なのは…」

「…！」

俺は結界を張ると同時になのはを抱き締めた。

「ユ…ーノ…君?」

「それ以上、自分を責めるな、なのは…」

「でも、私…。」

「確かに、俺達はアイツらを攻撃したが、アイツらは決して俺達を恨んでなどいない！」

「…！」

なのはが、目を見開いた。

「どうして…?」

「アイツらは、人を襲う事が願いじゃなかつた。それを止める事が出来た。それだけで、満足してるはずだ！」

「でも！私は何も考えていなかつたよ…」

まだ、反論していくのは

「今、考えるじゃねえか！自分がやつてしまつた事を罪を涙を流しながら考てるんじゃねえのかよ…」

なのはは、押し黙る。

「なら、それを忘れるな！そして、次に活かしてみろ！ただ下を見てるだけじゃ何も変わらない…」

「…（やうだ。私は、何があると下を向いてしまって上を見ような

「（迷ってただけだ！）シラい事から。」
なのはの瞳が輝きだした。

「（逃げてただけだ！）シラい事から。」
答えを見つけたようだな…。

「なのは、最後に言いたい事がある。」「

「何、ユーノ君？」

「Devil never cry（悪魔は泣かない）」

「えっ！」

「本当の悪魔は、欲でしか動かず、理性を持たないヤツだ。そして涙を流さない！」

なのはは、真剣に俺の話しさ聞いてる。
「だが、なのはは、自分の罪を認め、誰かの為に必死に涙をながしてる。お前は悪魔じゃない！」

なのはの瞳に光りが戻った。

「…………ありがとうユーノ君。」「

なのはは、俺の胸に顔を隠すように抱きついた。

「どう致しましてだな。」「

「今日は、本当にありがとなユーノ君。」「

「気にするな、友達なんだかな。」「

あの後、なのはは泣き続けてやつと落ち着いて帰つてる所だ。

「友達か…。」

何か納得いかない様子だ。

「どうした？」

「ううん！なんでもないよ！」

大丈夫か？

話しているうちに家に着き入ろうとしたら

「ユーノ君！」

突然なのはに、呼ばれ振り向くと

チユツ！

突然、頬に、キス、された。

「えっ！」

「お礼だよ／＼後、ユーノ君とはもっと、仲良く、なりたいかな。」

顔を真っ赤にして先に入つて行つた。

俺は、キスされた頬さすりながらある事が頭に浮かんだ！

「最大の女難がキターー！そしてこれでは、終わらないと俺の第六感が緊急信号を出している！」

色々ぶつ壊れたユーノであった。

時間の流れは早い！（後書き）

反省会

「何でだ——！」

「どうした、凄いあらぶりようだな。

「なんなの今回の話し意味わかんねえよ！」

「何で？見事にフラグ回収…

「D a a a a a a a i （死ねええええ！）」

「アレ！次回タイトルは！

「今日は無しだ！」

「マジ！なら、次回もお楽しみに！

「遺言はすんだか！」

「ウギヤアアアアアアア！」

一人は寂しいもの。（前書き）

Countジュエルシード現在ユーノが持っている数は

五個！

一人は寂しいもの。

色々と毎日大変は憑依者ユーノだ。
今も面倒事にあつて いる何かと言つとい

「なのはー早く起きろー学校に遅刻するぞー！」

「うーん、後、二十四時間なのー。」

「何お決まりパターンを言つてやがるーてか、それは一日だー！」
この寝坊助、娘を起こさなきゃいけないからだ！

休日が終わり、なのはは今日から学校な のだが、 今だにこんな状態
だ。

「早く起きろつてのーマジで遅刻するぞー！」

「うーん、ならユーノ君がおはよーのキスをしてー。」

「ゴイツ… 昨日事を踏まえて言つてやがるな！

#詳しい事は、前回の話してわかる。

フツフツフツ！

なのはー俺をからかつた事、後悔させいやるぜー。

俺は両手にあるモノを取り出した！

「右手におたま、左手にフライパンー！」

俺は、両手を高く構えて

「秘技【死者の目覚め】ー！」

ガンガンガンガンガンガン！

「『』やあああああ！」

凄まじい轟音とともにこなのはが飛び跳ねるよつに起きた。

「ううう。頭が痛いの。」

「早く起きないからだ。手間取らせやがつて。」「あの後、無事「？」になのはを起じて、朝食を取らせて今、学校に行く所だ。

「でも、今度はもつと優しく起こしてほしの～。」

「自分で、起きよつとは、思わねえのかよ。」

「ユーノ君に起こして貰えるのが、嬉しいんだもん」と素晴らしい笑顔で宣言するのは。

「…出来るだけ自重する。
なんだかんだで、優しいユーノである。」

「ありがとうユーノ君！」

「うわっ！なのは、くつ付くなー」「ラツ！」

朝からイチャイチャしてる一人であつた。

家族は、微笑ましく見守つていたそうだ。

「行つてきまーす！」

「行つてらつしゃい！」

やつと解放された。

なのは、もう少し自重してくれないか？
ホントマジで…。

「ユーノ君、ちよつといいかな？」

突然、士郎さんが俺に質問してきた。

「何だ？」

「なのはの」とついてだよ。」

深刻そうに聞いてきた。

えつ！これまでかの死亡フラグじゃないよなー俺、何かしたか！
内心、慌てるコーノである。

「ありがとうコーノ君！」

突然、お礼を言われた。

「えつ？」

突然過ぎて意味がわからない。

「何で？」

「なのはが、とても明るくなつた事に感謝しているんだ。」

「前は、明るくなかったのか？」

その話題を聞き、俺も真剣に聞いた。

内容は、士郎さんが事故で、入院してしまい家族がバラバラな状態になってしまったそうだ。

そこで、幼かつたなのはは、みんなに、迷惑、を掛けはいけないと心を開きながら育てたらしい。

「俺は、娘が苦しんでいるのに、それに気づいてやれなかつた。ダメな父親だよ。」
悲しげに語る士郎さん。

「でも、ユーノ君が来てからあの子は、元気を取り戻した。俺達に遠慮する事もなくなつたんだ。」
悔しそうに、語る士郎さん。

「だから、ありがとう。」

頭を下げてお礼を言われた。

「土郎さん、顔を上げてくれ。」

俺は、土郎さんにそう言つと顔を上げてくれた。

「俺は、特に何もしてないんだぜ？そんなに感謝される覚えはないぜ？」

「いや、でも……！」

「それに土郎さんは、自分はダメな父親と言つたが、それは勘違いだ！」

俺は土郎さんに、怒鳴り掛ける！

「何故…？」

「アンタは、今までなのはの事を大切に思つてたんだろ？何年も必死に、なのはが心を開いてくれるには、どうすればいいのか！」「まだ、俺は止まらない！」

「それは、立派な父親である証拠だ！勝手に卑屈的になつてんじやねえ！」

しばらく沈黙が走る。

「俺は、あの子の父親でいいのかな？」

「知らねえよ。問題なのは、アンタの気持ち次第って事だ。」

「そうか…。ありがとうコーノ君。何か吹っ切れたよ。」

その解答に俺は

「だから、俺は知らねーっての。」
頭を搔いで、一時その場を去つた。

数時間後

店の方が、忙しくなつたので、俺は町の中にいる。

久しぶりに一人なよくな、気がする。ああて、ビリする…

ビュ――――――！

突然、風が吹いたと思ったら

「止めてええええ！」

車椅子に乗つた女の子が風に押されて俺に突っ込んできた。

どんだけだよ風！そして何で女の子！女難の予感しかしねえ！
心の中で、考え方をしていくと

ドカ！

「キヤアアアツ！」

「ギヤアアアア！」

見事に車椅子に当たり、俺は倒れて、女の子も俺に重なるように落ちてくる。

「グワッ！」

女の子は、俺の胸に顔を埋めるように落ちた。

「ちよつ！大丈夫なんか！」

上に乗つた女の子が聞いてきた。

「大丈夫じゃねえ、女難の方が…。」

「えつ？」

意味のわからない解答をしてしまつた。

「本当に、すみません。わたし、あないなことになるとは、思ってもみなかつたわ。」

「気にするな。」

まさに衝撃的な出会いをして今は、落ち着いて話している。

「自己紹介まだだつたな。俺は、ユーノ・スクライアだ。」

「わたしは、ハ神はやてや。よろしううなユーノ君。」

「ああ、よろしく。はやて！」

果てしなく嫌な予感しかしないけどな。

心の中で呟くユーノであった。

その頃のなのは達は……

「アンタ、ユーノと何かあつたの？」

「えっ！どうしてアリサちゃん。」

「だって、なのはちゃん。ユーノ君の話しの度に嬉しそうな顔になつてるよ？」屋上で、お皿を取りながら、ガールズトークをする。三人がいた。

「ううん！何でもないよー（恥ずかしくて言えないよー。）」「

「何か、隠してない？」「

「怪しいね～なのはちゃん？」「

なのはに迫つてくる二人。

「何でそんなに聞いてくるの？」

怯えながら聞くなのは。

「だつてなのは、雰囲気が何となくが変わったからよ。」

「えっ！」

「本当だよなのはちやん？ 昨日、何があつたの？」

すずかに昨日と言われた瞬間なのはは、

「うう／＼。」

顔を真っ赤にするなのは。どうやら、思い出して恥ずかしがつてゐらしい。

「これは、何かあつたわね！ 何をしたのよあのバカユーノは！」

「今度キッチリ問い合わせる必要がありそうだね！」

顔を真っ赤にするなのはと何かを決意する一人のカオスな空間が出来ていた。

少し離れた場所で、集まつっていた男子が

——
—ユーノってだれだああ！

と叫んでいたのは余談である。

再びユーノ達は……。

「ハックション！」

「うわっ！ ユーノ君大丈夫なん？ 風邪ひいとの？」

「大丈夫だ。誰か噂してんだよ。」

現在俺達は、図書館に来て本を読んでいる所だ。

「そう言えば、ユーノ君つてこつちに来たばつかやの？」

「ああ、今はある家で居候してるとこだ。」

「ふうん、そな。学校は行かなくてええんか？」

「まだ、手続きしていないだけだ。」
適当に「まかした。

あれから數十分話し、はやてが話題を出してきた。

「私の足について何も聞かんの？」

はやはては、自分の足の事について言った。

「何で？」

「いや、な。周りの人達は、すぐに聞いてくるんやけどユーノ君は、聞いて「んへんから気になつたんよ?」

そう言つことか…。

「別に。相手が話してくれてないのに、聞くのは失礼だと思つたらだ。」

女の子だしそんな簡単に、聞くのは失礼だ。

「優しいんやね。ユーノ君は、」

何故か嬉しそうに言つてくるはやはて。

「大した事ねえって。」

ぶつきらぼうに返すユーノであった。

——
あの後、改めてはやはての足の事について聞いたが、本当に病氣か?
何か引っ掛かるんだよな~。

「どないしたのユーノ君?」

「何でもねえよはやはて、後、道はこれであつてんのか?」

現在俺は、はやはての車椅子を押して、はやはての家に向かっている所だ。

「うん~」めんな~ユーノ君。こないな事もして貰つて。

「気にはすんな。これも何かの縁だ。好意に甘えどか。」

「本当にありがとうなコーコー君」

楽しげに話す俺達であった。

そして俺達は、はやての家に着いた。

「じゃあ、俺帰るから、体に気お付けろよ?」

そう言つて俺は、帰ろうとしたら

「コーコー君!」

はやてに呼び止められ振り向いた。

「明日、またここに遊びに来ん?」

「えつ?」

「いやコーコー君が無理ならいいんよ! ただ、今日のお礼がしたいん

よ。」

妙に慌てふためくはやて。

「別にいいぜ?」

嫌な予感はするけどな。

「ホ、ホンマか!」

「ああ、別に断る理由ないし暇だからな。」

正直、慌てるはやてを見て断りにくかった。

「じゃあ、明日、朝早くでもええから遊びに来てなー!」

「おっ、おい! はやて…。」

「楽しみに待つとみからなー」

そう言つてはやては、家の中に入つて行つた。

「今日も波乱な一日だった。」

そんな事を言いながら帰るコーコーがいた。

また余談だが、この後ジュエルシードが出て、回収に向かつたのだが、アリサとすすかに何かを問い合わせられながら回収するコーノがいたそだ。

一人は寂しいもの。（後書き）

反省会

「増えたぞ！」

「それは、置いといて

「何だよ！」

「転生者って知ってるな？」

「ああ、オリジナルの主人公みたいなもんだろう？」

「出そうなんて思つてるんだ。

「バカか！お前俺を殺す気か！淫獣扱いされて狙われるつての！」

「まあ、余裕が出来たら出すか。」

「また次回だ！」

とても大変な一日（前書き）

Countジュエルシード
現在ユーノがもっている数は

六個！

とても大変な一日

どうも、お疲れの憑依者ユーノだ。

昨日は、色々と散々な一日だったぜ。

そして今日の俺の予定はと云ひて、昨日、合ったはやての家に遊びに行っている所です。

何もないことを願いたいがな…。

なんだかんだで、家に到着だ。早速、インターホンを押そう。

ピンポーン！

そして俺は、応答を待とうと思つたら

「山ー」

急に意味の分からぬ返しをしてきた。
だが！これで、遅れをとる俺ではない！

「川ー」

どうだー空気をつめることがなく答えたぞー！

「 谷豊の代表作のドリマヒムーー！」

「 フンー造作もないぜー！」

「 相だー！」

俺は瞬時に答えた！

「 大正解やユーノ君ーそれにギャグに対するノリもええでー私の相

方になるー。」

「どうでもいいからー早く扉を開けろー関西弁もどき娘がー。」
意味の分からぬ挨拶をしたユーノ達であった。

「んで、何にして遊ぶんだんだ？」

「そいやなー。」

やつと家に入れました。

「じゃあ、まずテレビゲームをやる?」

「ああ、いいぜ。」

やるのは、ガンダムです。
ちなみに今、白熱中です。

「ゴッドワインガー！」

「甘いでユーノ君！ダークネスワインガー！」

「今日こそ落ちりやフリーダム！」

「舐めるなよ『テスティ』ー！フルバーストだー！」

「トランザム！！」

「今日の私は阿修羅を凌駕する存在やー。」

「俺が俺達がガンダムだー！」

「会いたかったよガンダム！」

「世界の歪みを破壊するー！」

何か別次元に行ってしまっている一人なのであった。

「そろそろお昼かー。」

結局、昼まで熱中してゲームをやつていました。

「じゃあ、私が昼食作ったるからコーカー君は待つててな～。」

「えつ？ はやて、料理作れるのか？」

「もちろんやで！ 私、一人暮らしあから大丈夫なんよー。」「えつ！」

俺は驚いた。料理の事もあるが、はやてが一人暮らしとこいつ事に

…。

「あつ、コーカー君。別に気にしないでいいんよ？ 私はもう慣れどるから。」

最後に言つた事を言つていいな。

「はやて。」

「何や？ コーカー君？」

「俺も料理を手伝つだぜ！」

「えつ！」

とりあえず、手伝つ事にしました。

料理は野菜炒めです。そして、上手に出来ました。料理中の話しあは、飛ばします。

「凄いな～コーカー君！ 料理も出来るんか！」

「はやても凄いぜ！ 料理人の手つきだつたぜー。」

お互い褒めあっています。

「でも、何でそんなに上手いんや？」

はやてが質問してきた。

「それは、俺も一人暮らしだつたからだよ。」「えつ？」

はやては驚いた様子だ。

「俺さ、物心ついた時には周りに誰もいなかつたんだよ。」

「これは、本當だ。憑依が完了した時、俺は、一人、だつた。」

「そこからどないしたん?」

はやてが悲しそうに聞いてきた。

「生きる為に色々やつた。内容は察してくれ。」

「實際、罪になるような事はしていないがな。」

「寂しくなかつたんか?」

その解答に俺は

「寂しかつたわ…。」

「…！」

感情が籠もつた声にはやはては驚いた。

「でもなー今は俺の事を家族つて言つてくる人達と出会えたんだ!…明るく話すユーノ。」

そうスクライアのみんなや高町の人達が言つてくれた。

「だから、今は寂しくなんかねえんだ。」

「そりなんや…。」

Sideはやて

ユーノ君の話を聞いて胸を締め付けらるような感じやつた。

私には、両親が死んでしまい一人暮らしが、まだ記憶は残つとつた。

けどユーノ君は、最初から一人で生きてきたんや。それは、とてもツライ事や…。

だからユーノ君の事を家族と言つてくれる人達が現れて、嬉しいと思つとが、羨ましいとも思つてもうた。

自分にはそう言う人達はいなかつたからや。

「そりなんや…。」

私はこれかも一人なんやろうか？

「ああ、後、はやてに言つておきたい事があるんだ！」「えつ？なんやろ？

Side out

「なあ、はやて？」

俺ははやてに伝えなきやならない。

「何や、ユーノ君？」

「人が慣れたとか無理な事言つくなよ？」

「！私、無理なんて思つてへんよ？」

「嘘だな。」

「な、何でそんな事言えるんや…」

感情が高ぶるはやて。

「人つてのは、必ず一人では生きられないからさ。」

「そんな事あらへん！現に私は、今まで一人で生きてきたやけど、無理なんて思つた事なんてないわ！」
どこか苦しそうに話すはやて。

「なら、何で俺を呼び、自分が一人だと伝えた！」

「そ、それは……。」

「答えは、簡単だ！はやての心が、無意識に叫んでたんだよ。“一
人は嫌だ”でな！」

「……」

ハツーと反応を示すはやて。

「はやは、自分が気づかない内に、助けを求めてたんだよ！だから、俺に伝えたかったんじゃないのか…？」

俺は一度とめ、力を込めて言った。

「孤独の中にいる自分を引きずり出して欲しいで…！」

「…？（そうや。私は、寂しかったんや。家族もいない、足のせいで友達もない。何もかも諦めてもうてた。）」「

だから…

「（誰かに助けてほしかったんや！無理だと思つても、助けてほしかたんや…）」

自分の気持ちに気づいたようだ。

「はやて？」

ユーノがはやてに話し掛ける。

「ありがとうユーノ君。私、意地を張つとだけやつた。自分は、大丈夫やつて…。」

「そうか…。でも、本当の自分の気持ちに気づいたんだろう？」

改めてはやてに質問をした。

「勿論や！だから、ユーノ君！」

今度は、はやてが何か言いたいそつだ。

「私の友達に、‘家族’になつてくれへんか！」

…………こきなり、友達から家族にグレートアップした。

「いや、何故に家族宣言…」

色々飛ばしすぎだろ！

「私、もう一人は嫌なんよ？だから、ユーノ君に家族になつてもらいたいんや…。」

今にも泣きそうな、はやてが話す。

「ちょつ…はやて…」

何か非常にまずい女難が氣そつなんだけど！

「それとも、私なんかじや嫌なん？」

涙目 + 上田使いで聞いてきた！

なんか、俺がいじめてるみたいなんだけど…何この罪悪感…俺何かした！

心の中で葛藤するユーノ。

「ユーノ君？」

今にも泣き出しそうなんだけど…

「わかつた！家族にでも何にでもなつてやるぜ…」

俺は、ついに言ってしまった。
はやての反応は…。

「えうか～。嬉しいで、ユーノ君
完全にわつきまでの素振りがなくなっていた。

「演技かあああ！」

「いや～ユーノ君の家族宣言。とても格好よかつたわ！
「やかましい！この狸娘がああああ！」

「うわ～ユーノ君に襲われる～」

「そう言い逃げ出すはやて。

「待てコラア～！」

「捕まらへんで～」

そこには、楽しそうに走り回る一人がいたそうだ。

ー本当にありがとうなユーノ君

ーーーーーーーーーー

またまた変わつてなのは達…

「「「ムツ…」「」」

何や～り、変な電波を感じたようだ。

「ユーノ君、別の女の子と話してゐる氣がするのー！」
「確かにそうかもしないわねーあのバカならー！」

「ユーノ君たら、一体何をしてるのかな～？
教室の中で叫ぶ三人。

「あ、あのー高町さん達！」

突然クラスメートの男子が話し掛けってきた。

「 「 「 何！？」」

凄い気迫で反応する三人。

「あ、あのユーノって誰なのかな？出来れば教えてほしいんだけど？」

男子がそんな質問をしてきた。瞬間に…

一 よくぞ聞いたあああ！

一 貴様は英雄だあああ！
などと叫び声があった。

今、話している男子と叫んだ男子達は、なのは達のファンである。
彼女達に何回も出てきているユーノについて詳しく知りたいようだ。

まず、すずか

「 何でも、教えてくれたり相談に乗ってくれる優しい、男の子、だ
よ（本当は、それだけじゃないような気がするけど、まだよくわ
からないんだよね）。」

考え込んでるすずかを無視して

一 男だとおおおお！

一 しかもベタ褒めだあああ！

一 次にアリサ

「 私が遠慮せずに話せる相手ね！後、何かほっとけないのよね！（
でも、何かモヤモヤするのよね。それだけじゃ満足しないような。）

」

「 こちらも考えてる事は、同じなようだ。」

—遠慮しないってどういう意味だああああ！

—しかもほつとけないだとおおおお！

こちらも相変わらずだ。

最後になのは

「ユ、ユ、ユーノ君は大切な人なの！（別に間違つてないから大丈
夫だよね！）」

内心、焦るなのは。

—大切だとおおおおお！

一番の砲撃を喰らわし、男子達は撃沈した。

「何なの？」

「知らないわよ。」

「それより、次の授業の準備だね。」

何事もなかつたように話しを進める三人だった。

一方男子は…。

—ユーノに鉄槌おおおおお！

—うおおおおおお！
変な集会が出来ていた。

—そんでもってユーノ達…

「ブワックショーン！」

「またかいな！本当に風邪ひいとるんやないの？
「かもなー。何か変な悪寒がしたからな。」

現在、俺達は鬼ごっこをやめて庭にいます。

「次は何をするんだ?」

「そりやな~。」

考え方をしていると

「「いや~。」

突然、猫が現れた。

「あっ! ゴーノ君! 猫やで可愛いなあ~」

「まあ、確かに。でも、野良猫だから逃げんじゃね?」

そうなると思いし氣や

「「いや~」

猫の方から近づいてきた。

「うわ~ 可愛いなあ~ この猫~」

猫を撫でるはやて。

「人懐っこい猫なのか?」

疑問に思いながらも俺はポケットに手を突っ込んだ。

「どないしたんゴーノ君?」

「あつ~あつたあつた!」

俺は猫にあげる魚よのHサの袋を取り出した。

「ど~からだしたんや?」

「企業秘密だ。」

会話をしていると

「「いや~」

猫がエサに反応して飛びかかってきた。

「「」や―――！」

「『あやあああああ！』

猫におもつこきり攻撃されて、逃げて行つた。

「大丈夫か」コーン君？」

「俺が一体何をした……。」

攻撃された手をさすりながら考へる。

「うへん、コーン君が猫のある所を見てたせいかやつひ。

「つまり、猫は恥ずかしくて逃げたと？」

「多分、そうや。」

：俺の女難で動物だらうと関係ないんだ。

「氣おつけよ！」

新たに決意をするコーンであつた。

「んじや、もう帰るから。」
結局、一日にしてしまつた。

「うん 今日はありがとうなコーン君
「どう致しましてだな。」

「あつ！後、私明日からちょっと用事あるから遊びなーんよ。」

「そうか。わかつたよ。なら、また今度な！」

「うん 今度は泊まりに来てなー」

「そん時は、なのは達を連れてくるぜー」

なのは達の事は、話してあります。

「それは楽しみやわ～またな～。」

「ひして長い一日は、ジユエルシードの反応もなく終わりを向えた。

オマケ

Side 猫?

「うう～恥ずかしかつたよ～。」

私は、一時、人間の姿に戻つていてるけどさと顔が真っ赤だ。
そりやあエサを貰つた時は、嬉しかつたし顔も性格の方もよかつた
けど

「私の大事な所をガン眼されちゃつた／＼＼＼。」

「こ、これは、あの子に責任とつてもらわないと！」

「（アリアー！早く帰つてきなさい！）」

うわっ！ロッテからだ。早く帰らないとね。

とても大変な一日。（後書き）

反省会

「作者！話し全然進まねえぞ！」

「何を焦っている？」

「早く無限書庫にたどりつかねえと面倒になるからだ！」

「今回で、その安息の場は落ちたがな…。」

「どういう意味だ！」

「また次回〜。」

キャラは個性的！（前書き）

Count ジェルシード 現在ユーノが持っている数は

六個！

キャラは個性的！

暇な憑依者ユーノだ。また、やることがなくなってしまった。なので！

「遠くに行つてみよつ！」

久しぶりにおふざけはいりました。

現在、俺はまた出掛けています。ジェルシードが出るのではないかと思つたのですが。

「何か新たな女難な予感が…。」

要らぬ予感だけが、ビシバシ感じている。

キ――――――――ン！

「……出て嬉しいんだが、何故俺が女難について考えてる時に、反応しやがる…。」

渋々俺は、現場に向かい出した。

現場についてみれば、ツインテール娘にデバイスを向けられ獸耳女が俺に脅迫をしている。

「あなたは、何者？」

「もう少し、安全に聞けないのか？」

「なんだいその言い草は！聞いてるんだから答へなー！」
いや、デバイスを向けられれば、誰でもそう思つぞ？

何故、このような状況になつているかと言つと

現場に着いた時には、既に封印されていた所に俺が来てしまった。怪しく思ったそうだ。

「ハイツ！俺は、お前らの方が変だと思つぞー。俺は、手をあげながら反撃を開始した！」

「な、何で？」

「説明しなよ！」

フツ！俺を敵に回したこと後悔させてやるぜー

「まず、獣耳女！」

「あたしに言つてるのかい！？」

他に誰がいんだ！

「お前のコスプレは、ズバリ、犬、だ！」

「誰がコスプレだあー！コレは自前だよー！何よりあたしは、狼だよー！」

「嘘つけ！そんな立派な犬耳つけて誤魔化すんじゃねー！」

「犬でもなければ、付けてもいないよー！」

「お手！」

俺は、獣耳女の前に出て言つたら

「ワンー！」

普通に返してきた。人間の姿でやると凄いショールだな。

俺はニヤリと笑うと向ひつけ、ハツーと氣づいた。

「ハツハツハツー！お前は、完全に飼いならせた犬だー！鳴き声まで完璧だつたなー！」

俺は高らかに相手に言つ。

「ち、違う！ 今のは……！」

「言い訳は、見苦しいぞ、『犬』！」

俺が力を込めてトドメをさしたら。

「あたしは、狼なのにいいいいいい！」

泣きながら、崩れていった。

フツ！ 余裕だつたな。次は、ツインテールだ！

「次にツインテール娘！」

「ハツ、はい！」

思わず、力がこもつてゐようだ。

「その格好、恥ずかしくないのか！」

「一番、ふれてほしくない所を言つてきた！」

そんな事知るか！

「年頃の女の子が、その格好とは、お前ほど言つてゐる趣味をしている

！」

「こ、コレは、バリアジャケットだから関係ないよ……」

「否！ それは、自分で考えたデザインだろ！」

「うつ……」

動きが止まつたな、どうやら当たりのようだ。

「つまり、お前は過激な格好が好きなんだ！」

「わ、私は……！」

「反論するな！ 自分に素直になれ！」

ここで、俺は災厄の核爆弾を言った。

「“痴女”と認めろおおおおおー。」

「ひどいよおおおおおー。」

同じく泣き崩れてしましました。

カンカンカンカンカン！

俺、勝利！まさに外道だつたぜ！

スッキリしたようです。

「お～い、いい加減泣き止めよ？」

俺は、今だに泣いている。二人組に言つた。

「誰のせいだと思つてんだい！」

「ひどいわよ……。」

さすがに、かなり悪い事をしてしまいました。

「スマン、いきなり武器を突きつけられたからや。」

「あつー！ごめんなさい。よく話しても聞かないで、武器を出して。

「いや、いいよ。俺もかなりひどい事、言つちましたからな。」

「一応、自覚はしてるみたいだね？」

「ああ。改めて謝る。本当にすまなかつた！」

俺は頭を下げる謝った。

「ううううう、ごめんなさいー。」

「あたしも、いきなり怒鳴つてごめんよー。」

お互に謝り、小さな戦いは終わつた。

「ユーノは、魔導師なのかい？」

「ああ。後、フェイトもそうなんだろ？」

「うん。後、アルフは私の使い魔で家族なんだ。」

その後、打ち解けてお互いに自己紹介を終えて色々話している所だ。

「でも、何でジエルシードを集めてんだ？」

俺は疑問に思つた。何を目的で、集めているのか。

「それは（ぐぎゅるるるー）…。」

フェイトが話し出そとしたらアルフが、腹を鳴らした。

俺とフェイトは、ジト田でアルフの事をみた。

「（じめんよー！）

はあ～しようがないな。

「そろそろ匂だし、何か食いに行こいつ。奢つてやる。」

「ホ、ホントかい！」

アルフが尻尾をふり、耳を動かしている。相当、嬉しいみたいだな。

「アルフ！ダメだよ。ユーノに迷惑かけたら。」

フェイトがダメと言つてきた。

「フェイト、遠慮しなくていいぜ？さつきの詫びがしたいんだ。」

「でも（ぐきゅるるるー）…／＼…」

今度は、フェイトからだ。

「クックックッ。じつやう聞くまでもないみたいだな？」

「わ、笑ないでよユーノ！」

顔を真っ赤にしながら怒るフュイト。

「ユーノー！早く行け！ひじじゃないか！あたし、お腹が減つてしまふがなによ！」

そう言い、俺の頭に胸を押し付けるように抱きついた。

モード！

「つて！アルフ！胸を押し付けんじゃね！」

「なんだい、いいじゃないのか～。ユーノも気持ち良いんじゃないのかい？」

何て事を言つてきやがるこの狼は……。

「アアア、アルフ！ユノ、ユノユーノに失礼だよー。」
フェイトは目の前の光景を見て恥ずがつてゐる様子だ。

…純情すがれるぞフュイト。痴女と言つた事を口にしで、深く反省する
ぜ。

「何でだい？男は、いつこうのが好きなんじゃないのかい？」
何だその知識は…。

「成人した男にやつてやれ。」
襲われるだらうがな…。

「わかつたよ！ユーノが成人した時、またやつてあげるよー。」

「何でそなんだ！」

「なんだい？やつぱり今、やつてほしいのかい？」

モード！

「だから押し付けんな！」

また、胸を押し付けてきた。これじゃ、らちがあかない。

「フュイト！この狼なんとかしてくれ！」

ここは、フュイトに助けてもらつしかない！

だが！

「いいな、アルフ。あんなにコーノと仲良く出来て…。」「どこかに飛んでいるようだ。

「いや、戻つてここにフュイト！後、何言つてゐるか聞こえねえ…。」
内容は、聞こえていないようだ。

「私だけ、仲良く話したいし、構つてもらいたいよ…。」
相当、アルフが羨ましいそうだ。

「フュイト！頼むから戻つてここに…内容わからんが、多分叶えられ
るぞ！」「

「ホントコーノ！」

「ハヤツ！」

さすがフュイトだ。スピードの速さは伊達じゃないな。

キ-----ン！

「-----」「

ジエルシードの反応だ…。まさか、連続で同じ場所に来るとはな。

「二人とも構えろー。昼飯の前に、軽い運動をしなきゃいけないみた

「いだ。」

俺は、軽く飛びながら構えをとる。

フェイトは、バルティッシュから黄色の刃を出し構え、アルフも拳を構えた。

「グオオオオオオ！」

角をはやしたゴリラみたいなやつが現れた。ついでに、デカいな。

「どうするんだいコーカー？」

アルフが聞いてきた。

「何で俺？」

普通、フェイトだろ？

「私からもお願ひゴーカー。」

フェイトもかよ…。

「決まってる！三人一氣に決めるぞ！」

「うん！／あいよ！」

俺達は、向かっていった。

「ハアアアアアアア！」

フェイトがお得のスピードを活かしながら、ハーケンセイバーで攻撃していく。

「グアアアアアアア！」

ゴリラは、弱つてきている。

「アルフ！」

「まかせな！」

今度は、アルフが向かっていった。

アルフは敵の中心目掛けて右ストーレーを喰らわせ、相手が少し浮いた。アルフは、左足を蹴り上げて宙に浮かせた。

「ユーノ！」

「決めてやる！」

俺は両手を前に構えた。

「チーンバインド！」

両手から合計4本だし相手の四肢を拘束して

「おらあああああ！」

地面に叩きつけ敵は、バウンスを起しそうほど叩きつけられた。

「これで終わりだ！」

俺は体に楯を纏い、右足を出しながら急降下した。

「つおりあああああ！」

ドカアアアアアアアン！

ユーノが地面に到達すると同時に砂吹雪がまたた。

「ヤバい、やり過ぎた…。」

ユーノの手には、ジエルシードが握らでいるが、周囲には、隕石の落とみみたいなクレーターが出来あがっていた。

「何は、ともあれ終わってよかつた。」

「最後は、やりすぎなんじやないかい？」

「でも、ユーノ格好よかつたよ！」

俺達は、逃げるように現場を去り、飲食店に向かう所だ。

「ありがとなフェイト！嬉しいぜ！」

「えへへ…」「

フェイトは、感謝された事に喜んでいるようだ。

「ね、ねえ！ユーノ！」「

フェイトが声を上げてきた。

「何だ？」

「手、繋いでもいいかな！？」

やたら、必死に聞いてきた。

「勿論！ほら」「

俺は、左手を差し出した。

フェイトも右手を出して、手を握った。

「仲良いいね～二人とも。あたしも、ませておくれよ？」
一人のけ者にされたアルフが言つてきた。

「当たり前だろ？ほら」「

俺は右手を差し出した。

「ありがとねユーノ」「

左手でアルフは握ってきた。

「よし！改めて昼飯を食べに行くぜ！」「

「うん！／あいよ！」「

そこには、楽しそうに歩く三人がいたそつだ。

余談だが、フェイトはジェルシードを三つ持っていたようだ。

後、どこかの猫がユーノ達の事を嫉妬や羨ましそうな目でみていて
こんな事を言つていた

「私だって胸あるんだからねー！」

勿論、なのは達にもユーノの女難電波も届いていると想つ。

キャラクター属性一覧（後編）

反省会

「またかよ！」

「リアルが忙しいぜ」

「無視すんな！」

「これ、真面目な話しだから口!
マジかよ…。また次回だ！」

女は基本、積極的だ！（前書き）

Count ジェルシード 現在ユーノ達が持っている数は
十個！

女は基本、積極的だ！

「ここにちは、昼食をとっている憑依者ユーノだ。

一人だけではなく、さつき会つたフェイトやアルフも一緒だ。

「そろそろ話してくんねえか？何故、ジエルシードを集めていたのか？」

俺達は、昼食を済ませ本題に入った。

「私達、家族と旅行をしにこの星にきたんだ。」「旅行中だったのか…。

「そこで、偶然あたし達は、そのジエルシードの現場を目撃したわけだよ。」

そこで、ほっとけなくてジエルシードを回収してたわけだ。

「ありがとな！後、すまない！」

俺は、感謝と同時に謝罪もした。

「な、何でユーノが謝るんだい？」

「私達、何か悪い事した？」

二人が疑問に思っている。

「いや、せっかくの家族旅行を台無しになってしまったからさ。」

俺が、ジエルシードをきちんと管理していれば迷惑かける事なかつたんだけどな。

「ううん！気にしないでよユーノ！私達が好きで、やつてた事だよ。母さんの許可もとつてあるから！」

「ううん！気にしないでよユーノ！私達が好きで、やつてた事だよ。母さんの許可もとつてあるから！」

フェイトが慌てた様子で、俺に言ひてきた。

本心で言つてるんだろうな。やっぱり、優しいなフェイト。

「それに困っている人がいるなら、助けるのは当然なんじゃないのかい？」

今度は、アルフがそう言つてきた。

全く、主と似てお優しいな。心配してくれるんだからな。

「わかった、降参だ。素直に喜ぶ事にする。ありがとう一人とも俺は、笑顔で感謝の言葉を言つた。

二人も笑顔で返してくれた。

そこでまた、数分会話をし、時間は過ぎていった。

「そろそろ帰らねえとな〜。」

もう、夕方だ。

「えっ！ホントかい！もう少しいいんじゃないのかい？」

「俺もそうしたいが、また今度にしてくれ。」

「な、ならユーノ！これ！」

フェイトは、俺に紙を渡してきた。その紙には、ある住所が書かれていた。

「えっ？フェイト。これは？」

「そ、それは私達の住んでる所だよ！明日、もし暇なら遊びにき

てほしいんだ！」

顔を真っ赤にしながら必死に話すフェイト。

「いや、悪いんじゃ…。」

俺は、相手の事を気づかって弁解しようとするが…。

「大丈夫だよー母さん達にもコーノを話したいし、きっと喜んでくれるよ！」

凄い、フェイトってこんな積極的だったとは…顔が真っ赤だけど。

「じゃあ、明日待ってるからー！」

そう言い、俺に背を向けて走つていった。

「つて！俺、何も答えないんだけど！決定事項なのか！」

俺は、フェイトに大声で叫ぶが、全く聞こえていないようだ。

「待つておくれよフェイト！」

アルフも遅れて走り出した。

「あつー！コーノ！明日、楽しみに待ってるからね！」

アルフもそんな事を言い走り去つていった。

「結局行く感じになってしまった！ヤバい女難がくる予感がしてきた！」

もう、明日の事について思い悩んでいるコーノの背後から、殺意のオーラを出しながら、迫つてくる気配がある。

「（誰だー）」

俺は、瞬時に気持ちを切り替え振り向いたら

「さつきの女達は、だれよおおおおー！」

金髪の修羅が俺に飛び蹴りを放つている。

「つーー！」アリサか、きいやあああああー！」

俺は、飛び蹴りを避けられず顔面直撃をした。

「なんなんだ今日。」

「どういう事が説明しなさい！」

さて、どう言い訳をするか…。正直に言つたら「カツ消すー」の如くやられるような気がするんだが…。

ちなみに、なのはとすかは用事でいなによりだ。

「あいつらは、俺達と同じくジュークエルシードを集めてるんだ。」

正直に言つて、適当に誤魔化すしかないな。

「へえー。こいつ知り合になつたワケ？」

「ついさっきだ…。」

オーラを押さえこんねえかなアリサ。

「それにしても、仲良さうだったわね？何か約束もしてたわよね！」

ピンポイントに攻めきやがるな。

適当に誤魔化すしかない！

「そりゃあ、回収してくれたんだから嬉しいに決まってるだろー！」

「なら、さつきの約束は、何なんかしら？」

「また今度、手伝つとこう約束だ！」

「本当なんでしょうねーーー？」

「

頼むから、諦めてくれよー俺だって意味わかんねえだからなー！
数十分、それは続いた。

「全く、アンタは暇さえあれば、女と話すわけ！？」

「今も喋ってるだろ？」

「適当に誤魔化すな！」

俺は、何故かアリサを家まで送ると言う任務をやつしている。

話さないかわりに、送つて行けと言つ話しだ。

「てか、何でそんなに気になんだよ？」

アリサがそこまで、怒っている理由がわからなかつた。

「そ、それは…（私だつてわかんないわよ！でも、アンタが知らな
い女の子と話してると凄くムカつくのよー）。」「顔を真っ赤にしながら心の中で怒鳴るアリサ。

「んつ？どうした？」

「な、何でもないわよーこのバカ！」

「喧嘩売つてんのかオマエは！」

そう言い、軽いじやれつきあいを始める二人。

だが…。

キ——————ンー

ここにきて、ジェルシードの反応が出た。

「行くぞアリサ！」

「わかつてゐるわよ！」

俺はすぐに結界を張り、アリサと一緒に現場に向かった。

現場に着いた俺達がみたものは…。

「あれ、犬よね？」

「とても凶暴そうに見えるがな。」

目の前には、巨大な犬がいた。

…アルフじゃねえだろうな。

「何だ貴様らは！」

訂正だ。もう男の声でした。

「ユ、ユーノ！ 犬が喋つたわよ！」

「落ち着けアリサ。ジエルシードの影響だろ。さて、コイツの願いはなんだ？」

「失せろ！ ガキがあああ！」

牙を出しながら迫つてきた。

だが、この程度で遅れば取らない！

「アリサ！」

「わかつてゐるわよ！」

アリサは、犬の前に立つて待つている。

犬は、アリサの前に噛みついてきたが、アリサは、両手の炎を噴射させ、上空に逃げたが

「ハアア！」
「グワア！」

また炎を噴射させ、犬の頭にかかと落としを決めて、ダメージも与えたみたいだ。

「さて、俺もやりますか。」

俺の手には、【ドラゴンナイトのカードデッキ】が握つてある。

カードデッキを前に出した。

バチバチ！と電流と共に腰にベルトが巻かれていた。

「変身！」

カードデッキをベルトに装着すると、デッキは回り出し、俺の周囲にも俺を包み込むような光がでた。

「つしゃあ！」

変身が終わり、そこには龍を纏つた、騎士、がいた。

「さて、やりますか！」

俺は、犬に向かつて右フックをかました。

「ぐつ！」

犬は、少し横に飛んだ。

「なめるなよ！グワ！」

突然犬は、オレンジ色の銃弾共にまた吹き飛ばされた。

「油断してるとカツ消すわよ！」
「アリサ…、イメージ合いすぎだ。」

「ぐつ！人間が！」

また犬が迫ってきた。

『Sword Vent!』

俺は、すぐにカードを読み込ませ武器を出した。

「ハアアアア！」

俺は、ドラグセイバーで相手の事を切り刻む。

「ぐあああああ！」

犬は、後退していくが

「怒りの爆発！」
スコッピオ・ティーラ

アリサが、憤怒の炎を連射し、極太のレーザーで追い討ちをかけた。

「ぐぎやあああ！」

直撃をして相手は倒れた。

「倒したの？」

アリサが質問してきた。

「いや…。」

「ま、まだ…だ！」

犬は、苦しながらも立ち上がっている。

「…、ちょっとアンタ！そんな無理したら死ぬわよ…」

戦っている最中なのに、相手の事を気づかうか…。やっぱ、あのボス二人に似てる要素を持つてるなアリサは。

「悪いが…俺…は、死ん…でる…と…同じなんだ。」

犬が苦しまみれに言葉を吐いた。

「どういう意味よ！」

アリサは、訳がわからない様子だ。

俺は、犬にある質問をした。

「寿命なのか？」

俺が、喋つたらに犬は頷いた。

「どういう事よコーノ！」

「簡単だぜアリサ？ ジョルシードは、この犬の“生きたい”と言つ願いを叶えた。」

「えっ？」

アリサは、あまりにも以外な話しに啞然となつてしまつた。

「誰でも思つだろ？ 死にたくないっていう願いがさ？」

そう、人間など関係なく生きとし生けるものは、みんな“生きたい”に決まつてゐる。

「で、でも何で犬は、私達を襲つてきたのよー！」

まだ、信じたくないようだな…。

「忘れたのか？ ジョルシードは、願いを歪ませる。本人の意志とは関係なしに。」

「そ、そんなの可哀想よー。コイツは、ただ生きたいだけなのに…。涙を流し始めるアリサ。本当に優しいなお前は…。」

「だが、ジョルシードは、それを許さない。現にヤツは、ボロボロなのに動こうとしている。完全に振りまわされてる証拠だ。」

だが、俺は遠慮はしない。こんな事が、あるといの、世界、に入る前に聞いたのだから。

「ユーノ、あの犬ビッグやつたら助かるのよ？」
助かるか…。

「助ける道は、ただ一つだ。ヤツにトドメをさすことだ。」

「な、何でよ！」

「このまま放つておけば、周りに被害がでる。それは、出来ない。アリサは、何とか方法がないのか考えている。」

「少年よ。俺を倒してくれないか？」
犬が話しだした。

「何いつてんのよーまだ助かる道はあるわー！」
アリサは、必死になつている。

「いいんだよ少女よ。俺は、長くない。石など関係なしに死んでいくだろ。」「そんな…。」

アリサは、崩れ落ちてしまいそうになる。

「少年。では、トドメをさしてくれ。」「ああ…。」

俺は、デッキからカード引いた。

「最後に言つておきたい。
犬が突然話した。」「何だ？」

「俺を止めくれてありがとう。誰も傷つけないでください。」

「……」の、バカが！

『Final Event!』

「グオオオオオオ！」

ドラグレッターが現れ、俺を囲むように飛んだいる。

「ハアアアアアアア！」

腰を低く落とし特徴的な構えをとる。

「タア！」

俺は空中に舞い上がり、蹴りの体制をとり

「うおりやあああああ！」

ドラグレッターの火球を受けながら必殺技の【ドラゴンライダーキック】を喰らわせた。

「ありがとう。

犬のそんな声が、聞こえたような気がした。

俺達は、あの後残った犬の遺体を弔っている。

「ねえ、ユーノ？」

「何だアリサ？」

「私達って正しい事をしたのよね？」

「ああ、やつだ。」

「な、何で私はこんなに悲しいのよ…。」
アリサは、また涙を流す。

「アリサ！そいつの前でもう泣くな！」
俺は、アリサの手を握った。

「ユーノ？」

アリサは少し驚いている様子だ。

「お前が泣いていたんじや、そいつま、いつまでも報われねえんだぞ！」

「でも、私達がやったことは…！」

「ああ、確かにヤツの寿命を縮ませただけだ…。」

「な、り…！」

「でもな…」

俺は、一度区切りを入れる。

「あのまま、ほつといて暴れるのがヤツの願いじゃなかつたハズだ

「…！」

「…」
そうアイツは、そんな願いじゃなかつた。

「だから、アリサ。これ以上、責めるな！俺達は、アイツの事を形はどうあれ、助ける、事ができた。」

そう、だからアイツは最後にお礼を逝つてしまつた。俺は、そう思
いたい。

「ユーノ、私達は助けたのよね？」

アリサが聞いてきた。

「ああ、勿論だ！だからアリサ！」

俺は、アリサと向き合って告げる。

「自分の成すべき事に“覚悟”を持つて生きろ！」

「！！（私は甘えていたのかもしれない。何とかなる、悲しい結末
なんてない。）」

でも！

「（私自身がそれと同等の覚悟を持つていかないと意味がないじゃ
ない！）」

アリサは、涙を拭い再び俺に向き合つた。

「ユーノ！私の“覚悟”をしつかり聞きなさい！」

「ああ！」

「私は、もう迷はないわ！自分の成すべき事、どんなにツライ事が
あっても…。」

そしてアリサは、力を込めて宣言する。

「“覚悟”を持つてと生きて行くわ！だから、ユーノ！」

そこには、やつきの泣き顔ではなく決意の顔だ。

「これから私のちゃんとその日に焼き付けなさいよ…」「
わかつたぜ！これからもお前の覚悟を見届けてやるぜ…」

俺がそう答えると

「当然よーーーーー！」

アリサは、俺に抱きついた。

その顔は、とても嬉しそうだったようだ。

「さて、せつと着いたな。」

「全くな。」

俺達は、やつと家に着いた所だ。

「ユーノ！今日は感謝するわ！自分の気持ちに気づけたからねー！」

「お嬢様の役に立てて光榮だ。」

少し、おふやけをいれる。

「何気に違和感ないわね。」

「マジか…。」

好評だつたみたいだ。

「ユーノ？」

「何だ？」

まだ、何かあんのか？

「疲れたから肩を貸しなさいーーー！」

「ハイハイ。」

最後くらい聞いてやるか。

俺は、アリサに近づいたらいきなり両手で、俺の服を掴み引っ張った。

「へつ？」

チユツ！

その勢いで、アリサは俺の頬にキスをした。

「ア、アリサ……？」
な、何故に…。

「！」褒美よ／＼！私にこんな事してもらつたんだから喜びなさい
！」

いや、あの、色々と思考が回らないのだが…。

「またねユーノ！後、ちゃんと私を“魅なさいよ”！」
アリサはそう言つと走り去つて家の中に入つて行つた。

一方ユーノは…。

「俺にどうしろてんだー！」

一人、意味がわからず叫んでいたそ�だ。

女は基本、積極的だ！（後書き）

反省会

「またなのかー！」

「順調みたいだな。

「お前が、 そうしてんだろうがー！」

「この調子で逝け！

「字が違うぞ！」

「また次回をお楽しみに！」

問題は抱えてるモノだ！（前書き）

Count ジュエルシード 現在 ユーノ達が持っている数は
十一個！

問題は抱えてるモノだ！

どうも～。最近、毎日が忙しい憑依者ユーノだ。

また俺は、遊びの行く予定ができてしまった。
：強制的な。

さて、今俺は、フロイトに教えもらった住所のメモを見ながら歩いている所です。

「あつー。パーー。」わらわだよー。」

俺の歩く先に、フロイトが声を上げながら、場所を示していた。

「なあ、フェイト。もしかしてずっと待ってたのか?」「俺は、フェイトに追いつき話している所だ。

「うん 来て来れるのが楽しみだつんだ」「

なんていい子なんだ……思わず感動た。

「ありがとなフュイトー！今日は、楽しく遊ぼうぜー。」

卷之二

そして俺達、笑いながら、足を進めて行つた。

「ここが、私達の住んでいる所だよ。」

場所は、マンションだが、この部屋だけは大きさが違つよつた。

「ロード」

「うん。中に入つたら紹介するね！」

そして、扉を開けた瞬間……。

「フライテ――！」

黒髪の美人のお姉さんが出てきてフェイトに抱きついた。

えつ？誰この人…。

「か、かか母さん！恥ずかしいよ！」
フェイトは、顔を真っ赤にしている。

てか、母親かよ！誰から見ても二十代にしか見えないんだけど…ついでに女難の予感が！

「ケガはなかつた！誰か怪しい人に声掛けられてない！」
抱きつくほどの心配つて…。絶対この人、親バカだ。

「だ、大丈夫だよ！何よりユーノが一緒だつたから！」
そう言い、ユーノの方に視線を送らせる。

……フェイト！お前俺を殺したいのか！親バカな人に、異性を紹介する事が、どれだけ自殺行為な事を！
心の中で叫ぶユーノである。

「アナタが、ユーノね？」
フェイトを離し、俺に近づいてくる。

「はいっ！」

思わず力が入ってしまった。だつて迫力が…。

考えてる間に俺の前まできた。

「ありがとう…」

ムギュ！

「フグツ！」

突然、真正面からこの人の豊富な胸に抱き締められた。

いや、冷静に語つてる場合じゃないだろ！

「ムグ！ムムムグ！」

抜け出そうするのだが、ガツチリ捕まっている。

一方母親の方…。

「あ…アン ユーノ君つて積極的なのね」

ユーノが胸の中で、必死に抵抗して居る上に、息も荒くなっていたので、気持ちよく感じてるらしい。

「ムン！ムムムング！ムグ！（やかましい！離せ！やけに艶っぽい声を出すんじやねえ！）」

関係なしに、怒っているようだ。

「ア…ウン…ヤン ユーノ君たらそんなに頑張らなくていいのよ
ユーノがさらに動いたせいで、いつも相変わらずである。

一方フェイト…。

「…／＼。」

目の前の光景に言葉です、顔を真っ赤にしてオーバーヒートをしている。

純情すぎる子です…。

永遠に続くと思われたが…。

「何をしているんですかブレシア！」

突然、帽子を被った女の人が、母親をひつぺ剥がした。

「ヤン」

「ブハア！」

やつと解放された！後、声を出すな！

「あら、コニースどうしたの？」

顔がやけに艶っぽい感じで聞いている。

「フヒイトのお友達になんて事をしてんのですか！」

顔を真っ赤にしながら怒っている。

「あら？ほんのお礼よ コーノ君も気持ちよかつたでしょ？」

「どう言つお礼だよ！もつと平和的なのないのか！」

やつと反論する事が出来たコーノである。

「ほら！彼もそう言つているのですから謝つて下さい！」

「ちよつと待つてくれないかしら…」

突然、母親が話しの流れを止めた。

「何だよ？」

俺は、渋々聞いてみた。

「まだ胸の余韻が…」

そう言い、胸を強調している。

「プレシアアアアー！アナタと言つ人はあああああ！」

……遊ぶ前から、この仕打ち。俺の精神持つのだろうか？

心配になるゴーノで合つた。

「お～い、フェイト。いい加減起きろ～。」

「……／＼。」

まだフェイトは、放心状態でした。

お約束のなのは達。

「ウフフ」

「アリサちゃんが、満面の笑みなの…」

「あんな顔、見たことないね。」

なのは達は教室にいるのだが、唯一アリサだけが笑顔全開で合つた。

「ねえ、アリサちゃん？」

なのはは、質問した。

「うん？ 何よ？」

気持ちを戻すアリサ。

「昨日、ゴーノ君と何か合つたんだよね？」
すずかが、そう聞くと

「ハアっ！ ベベ別に何もないわよ！ ゴーノだつてこれほつち関係
ないんだからね！」

顔を真っ赤にして反論するが、逆効果である。

「嘘はいけないよアリサちゃん！」

「正直に話してほしいのー！」

「一人とも納得いかないようだ。

「（ひるめきこいつるさ）ひるめい！何もないつて言つたらないのよー。（よく考えれば、凄い恥ずかしい事しちやつたじやないー。）

今さら、思い出すアリサ。

「（でも、ユーノだつたから私は…。つて違う違うー。アイツはただの友達なんだからねー！）」

自分の思いを余程認めたくないらしい。…悔しそぎで。

一方二人は…。

「（ううー！ユーノ君てば、絶対アリサちゃんに優しい言葉を囁いたに決まってるのー。もつと私にも言つてほしいのー。）」

「（アリサちゃんもか…。これは私も遅れていられないよー。早速明日、ユーノ君を家に招待して今よりもっと仲良くならなくちゃー。）

それぞれ、思つている事は別なようだ。

後、男子と言えば…。

一おのれコウウウウノオオオオ！

一貴様はどれだけの罪オオオオ！

一お前は、一体なんなんだああああ！

相変わらずである。

ユーノに幸あれ…。

変わつてユーノ達…。

「むつ？」

「どうしたんですかユーノ？」

「いや、リニース何でもないぜ。今、不愉快な電波を感じたからさ。」

「大丈夫ユーノ？」

「大丈夫だぜフェイト…」

俺は、やつと当初の目的で遊んでいるのだが…。

「ほひ、ユーノ！早く引きな！」

「ユーノ君は、考えこむタイプなのよ。」

家族全員で、トランプをやつている。
ちなみに、昼過ぎだ。

今やつているのは、王道のババ抜きだ。

「さあさあー早く引いて楽になりなー！」

「麻薬の取り引きみたいに言うなー！」

何故、こんなテンションなのかと言つと

実は、一位の人気がビリに何でも命令できるといつもルールを作つてしまつたのだ。

ちなみに一位は、フェイトで残つているのは、俺とアルフなのだ。

「急かすなアルフー今、お前の事を楽にしてやるゼー。」

「やれるものならやってみな！」「たかが、ババ抜きでこのテンションショーンである。

「これだああ！」

バシン！

俺は抜いたカードを見る。

「何！ババだとオオオオ！」

「まだまだ、勝負は続くみたいだね！」

クッ！こづなつたら師匠達の幸運スキルを……

卑怯な手を考えていたら……。

「取ったああああああ！」

バシン！

「何いいいいいいい！」

俺が引かれカードは！

「やつたああ！あたしの上がりだよー！

「負けたああああああ！」

本当に仲の良い二人である。

「じゃあ、ゴーノ？命令するね？」
「何でもこーーーーー！」

覚悟を決めたぜ！

「ユーノ、私の“友達”になつて下さー！」

「えつ？」

俺は、突然のお題に驚いたが、瞬時に答えた。

「無理だ。」

それは、否定の言葉だ。

「えつ…。どう…して？」

フェイトは、予想もしない答えに泣きそうになつていて。

「何で事言つんだいユーノ！」

「ひどすぎますよユーノ！」

「どういう事が説明しなさいユーノ君！」

三人は怒っている様子だ。

いや、だつてお前ら…。

「俺とフェイトは、昨日からもう“友達”だろ？」「

「えつ！」

フェイトが驚き、他の三人も驚いている。

「だつて一緒に戦つてお互いに助けあつたり、一緒に飯食つて楽しく話したじゃん？」

「う、うん…。」

それに…

「お互に“名前”を呼び合って楽しく遊んでだ。これは、俺達が“友達”である証拠なんだよ！」

「…、本当に私はユーノの友達？」

「ああ、勿論だ！それとフェイト！俺に対しても遠慮はするなー！」

「えつ？」

今度はユーノの言葉にフェイトが疑問に思った。

「わ、私遠慮なんか…。」

「だつたら、直接俺に言わなかつた！？」

「う、それは…。」

「怖かつたんだろ？拒絶されてしまつ事が！」

「…！」

フェイトは、驚く。

「ちょっとユーノ！」

止めに入ろうとするアルフ。

「待つて下さいアルフ！」

それをリースが止める。

「何でだいリース！」

「落ち着きなさいアルフ！ユーノ君にも考へがあるのよー今は、信じましょ。」

フレシアも止める。

「何でだい！フレ…シ…ア…。」

そこにいたフレシアの顔は、まさしく母親の顔だった。

「信じましょ、『ユーノ君』を…」
そう言い一人を再び見守った。

「フュイトーお前が何を抱えているのか俺には、わかんねえ！」
けど！

「本当に友達なら、俺自身の事も信じてほいんだよ！それが、友達って言うものだ！」

「…（私は、怖かった。自分の“存在”を認めてくれるのは、家族だけだと思つてた。）」「でも！」

「（ユーノは、私に勇気をくれた！私自身の事をふまえて考えてくれてる！ただ、怖がつてるだけじゃダメなんだ！）」
フェイドは、決意をした。

「ユーノ！私、言いたいことがあるんだ！」
「ああ！」

「改めて私の友達になつて下さい！」

「それは、さつきの罰ゲームの話でか？」

「ううん…」これは正真正銘、私の‘意志’だよ！他の誰でもない、私自身の…

「そうだフェイドー本当の気持ちを伝えたいなら、遠慮なんてしないでいいんだ！」

「うん！私、わかる事ができたよ！自分自身について…
その顔に迷いはないようだ。

「だから、ありがとうゴーー、私を『氣づかせてくれて…』。
そう言い俺に抱きついた。

「どう致しま『コウウウウウノオオオオ…』『げー！アルフ…』
突然アルフが、後ろから泣きながら、俺の後ろに抱きついた。

「あたし、感動したよー！今まで、フェイトの事を思つてやれるヤ
ツがいるなんて！」

「わかつたから、離てくれ！」
鼻水と胸のコンボが…。

「それにゴーー格好よすぎだよー！あたし、惚れそうだったよー。」

「サラッと汚い事言づなー！」

本当にこの狼は…。

「いえーゴーー、アナタは立派でしたー！」

「リースもかー！」

「アナタは、昨日会つたフェイトの事を必死に考えてあげてる…。
リースつてこんなキャラだつたけ！」

「その姿は、とても素敵でしたー！
顔を赤らめるなりース！」

「そりよゴーー君。アナタは立派よ。
『フレシアさんまで…。』

「フエイトが抱えていた問題をアナタは、本気になつて解決してくれたわ！」
フレシアさんの顔がまさしく母だ。

「だからコーノ君！」

締めは、大事だぞフレシアさん！

フレシアさんは、力を込めて宣言をした。

「私の“夫”になりなさい！」

「シリアスの空気をぶち壊すなああああああ！」
いきなり、夫宣言をされた。

「か、母さん！何でそんなの…」

「さつきの流れにそんな選択肢はなかつたぞ…」

俺達、二人は質問した。

「単純に今日のコーノ君と過ごしてきて彼を氣に入つたからよ…」「本当に簡単な理由ですね！」

「でも、年の差があるんじゃないのかい！」

「そんなもので、私は止まらないわ！」

「発言が格好よすぎるぞ…」

面倒くさい事になつてきやがた。

「ユーノ！」

今度は、フエイトか！

「セツの記ゲームのお題だよー。」「ここまでそのネタを出すのかー。

「お題は、母さんの話しが断つてねー。」

「フヒイトーお前は、救世主だー。」

俺は、思わず泣いた。純粋なやつがいて助かった。

数時間もこの話しが、続いたそつだ。

問題は抱えてるモノだ！（後書き）

反省会

「作者あああああ！」

「力オスだつたな！」。

「意味わかんなすぎだろ！」

「すまん。調子に乗りすぎた。

「ホント頼むぞ！」

「また、次回をお楽しみに！」。

本当に何もか一（前書き）

Count ジュエルシード 現在ユーノ達が持っている数は
十一個！

本当に子供もか！

おはよー「じゅい」ます！憑依者ユーノだぜー……無駄にテンション高いのは察して下さい。

昨日、色々ありましたが、何事もなく一日が終わりました。。

…本当に何もなかつたからな！何か期待するようなイベントなんてなかつたからな！

心の中で必死になるユーノである。

「どうしたユーノ？考え方なら相談にのるぞ？」

「何でもないぜ恭也さん！それより早く行こぜー！」

ちなみに俺は、恭也さんと一緒にすずかの家に遊びに行く所だ。

元々すずかとは、遊びに行く約束をしていたのだが、恭也さんも付いて来る事にしたらしい。

「恭也さん。何なんだ大事な話しがあるって？」

「それは、着いた時にみんなと話す予定だ。」

そう恭也さんは、「俺」に対して話しがあるらしい。わざわざ、田村家で話す事なのだ。余程重要なんだろうな。

「まあ、いいけど。それが終わつたらすずかと遊んでいいのか？」

「ああ、勿論だ。…………お前が真実を知つても大丈夫なら。」

最後に小声で言つ恭也さん。

…最後は、何て言つたかわからなかつたけど、恭也さんつひうそつな顔をしている。

「恭也さん！俺なら大丈夫だぜ！」

何？

俺は、恭也さんに言つ。

「俺は、何が待ち受けているか決して田を背けたりしない！何があひうと正面から受け止めてやるー！」

—
!

内容は、知らないがきっとツラい話しだけに違いない。それでも、俺には話してくれるんだ。

「… ありがとうございます。話す前からそんな事を言ってもらひたの
が嬉しいぞ。」

やへ老母での悲しい顔はなくないでいた。

「ハッ。やうだな。あひゆとこがい。」

そう言いながら、話す俺達は仲の良い、兄弟、に見えていたそうだ。

- - - - -

やつと着きました月村家。相変わらず、罷が凄い。

卷之三

眼について語っているんだろう。

「ああ、いいのである。

「変とは、思わなかつたのか？」

「別に。何か事情があんだろ?」

でなきや、こんな罷仕掛けないからな。

「ああ。じゃあ行こう。」

「了解。」

俺達は、家に入つていった。

「初めましてユーノ君。私は、月村忍。すずかの姉よ。」

「どうも…。」

現在俺は、広い部屋の中で、月村家の方々と自己紹介をしている。周りにもメイドのファリンやノエルもいて恭也さんもいる。

すずかは、忍さんの隣にいるよひだ。

……何これ拷問か何か！恭也さんの大事な話しつて完全に死亡！「ラグ！俺、死ぬのを決意したのか！またまた、心の中で叫ぶユーノ。

「单刀直入に聞くわ。すずかの事どう思つてる？」

「大事な友達だ！」

俺は、空きを入れる事なく答えた。

「何があつても？」忍さんがまた聞いてくる。

「愚問だな！俺の言葉に嘘、偽りはないぜ！」

何が言いたいのかわからんねえけど、すずかは大事な友達なんだよ！

「そう…。ならすずか、後は任せるわよ。」

「うん。お姉ちゃん。」

今度は、すずかに話しを託すよひだ。

「すずか？」

いつもとは、比べにもならない暗い顔している。

「ユーノ君、これから私が話す事、最後まで聞いてくれる?」
「ああ。」

すずか、お前は一体何を抱えているんだ?

話しは、壮大なものだつた。
夜の一族、そして“吸血鬼”。どれも一人の女の子が背負えるはず
が内容ばかりだ。

「これが、全てだよ…。」

すずかは、悲しみの顔でいっぱいだ。

「すずか…。」

「怖いよね…。人とは違う私が…。」

その解答に俺は…。

「全然!」

問題なしだとも言える顔で宣言した。

「えつ、な…んで?」

すずかは、驚いているが、顔に笑顔が戻つてきている。

「そこで俺が怖がる意味がわからないのだが?
「だ、だって!私、人とは違うんだよ…。」

「それがどうした!」

「! !」

急に大声で遮つた。

「人とか吸血鬼とか俺には関係ないんだよ！俺にとつてのすずかは、いつも優しくてみんなの事を常に考えている……」

「ユーノ君……」

「それが俺の知っている、月村すずか、だ！今更、自分の正体のせいで、距離を置こうとするな！」

「！！」

「そう自分の正体がなんだってんだ！それを言つなら俺の方が恐怖の対象だろ！死人が蘇つてんだぞ！」

「すずか、自分を恐れるな！自分自身を恐れてたんじゃ変わりたくとも変われないぞ！」

「でも、私一人じゃ……！」

「誰が一人なんて言つた！俺が俺達が一緒に背負つてくに決まってんだろう！」

「！！、ユーノ君……」

「すずかが、勇気を振り絞つて言つた事を見てみぬ振りなんてできるワケないだろ！だからすずか！」

頼むからそれ以上抱えこむなすずか！

「自分を好きになってくれ！どんな形でもいい！それが、変われる第一歩になるんだ！」

「！！（私は、嫌いだった。きっと私の正体だけでみんなは、嫌いになるに決まってる。）

けど！

「（ユーノ君は、そのどちらでもない、私自身を見て答えを出してくれた！）」

すずかの笑顔が、戻った。

「ユーノ君！ 私、決めたよ！」

「何をだ？」

「私は、もう自分のせいだけで怖がるのはやめるよー。本当に大丈夫なのか？」

「うん だつてユーノ君が一緒に背負つていってくれるんでしょ？ “私”を？」

「ああ、勿論だ。だからもう我慢するなすずか…。」

「ありがとう…ユーノ君…」

すずかは、両腕を俺の首に巻き付けるように抱きついた。

一方ギヤラニーは…。

「うつ、うつう。」

「泣くなよ、忍。」

「だつて恭也ああ！ ユーノ君いい子すぎるわよー！ あんなに必死になつて助けてくれる子なんていないわよー…」

「だな。何せ俺の自慢な、弟、みたいなものだ。ユーノ、お前は期待以上の答えを出してくれた。ありがとう…」

感動する恋人達…。

「良かつたですねすずか様。思いを伝えられて……。」

「……／＼。」

「ファリン。何をユーノ様を見て顔を赤らめているんですか？」

「フェ！私、見てませんよ！全然、格好良かつたなんて思つていませんよ！」

「隠す気あるの？……確かに素敵でしたけど。」

何せり座じいメイド達……。

そしてユーノ達……。

「ユーノ君……。」

「何だ？」抱きつきながら聞く。

「私、もう我慢できないよー！」

力プツ！

「へつ？」

「……」「あつ……。」「……」

首に噛みつかれた。

「ええええええ！」

ちゅるるるるるるるるー！

ぬおおおおお、凄い勢いで吸われてる！後、不思議で痛くない！

「ちょーすずか！やるなら私達がいない時にやりなさいー！」

「そういう問題か忍！ユーノがヤバくないかー！」

「お、おお姉様！すずか様があんな大胆にー！」

「落ち着きなさいファリン。」

「

まだ、眺めている四人。

いや、助けてくんないのかー！」のままだと絞りとられるんだけどー。

「ふはあ！ユーノ君の血、おいしい…。ゾクゾクしちゃうよ」
血を吸い終わり、顔を向き合わせてきた。

その顔は、小学生とは思えない艶がある大人な雰囲気だ。

「す、すずか！」

ヤバいやばい！今更になつて女難が発動なのか！

「ユーノ！そこから逃げろ！大変な事になるぞ！」

恭也さん、逃げたいんだけどガツチリ捕まつて無理です。

「ユーノ君」

すずかの顔が迫りそして。

チュッ！

「んつ」

「んつーーー！」

唇にキスされた。

すずか！興奮しそぎだ！

ユーノは、離れようとするが。

レロッ！

「…（すずかのやつ舌を入れてきやがった…）」

「んっ…んちゅ…くちゅ…んあ…レロ」

「んあ…くちゅ…ぬちゅ…レロー！」

何度もすずかが、角度を変えながら「トライーアップキスをしてくる。

「ふはあ

「ふはあ！」

やつと終わった。

「ユーノ君。どうだつた私とのキス、気持ち良かつたよね？」
その質問に俺は…。

「俺に質問するなあああああああ！」

俺は、部屋を走り去つた。

「あれ？ ユーノ君つたら鬼！」なの？「じゃあ、捕まえたら私の好きにしていいよね！」

そう言い、ユーノを追つすぐ。血を飲んでしまつたせいで、興奮状態になつてゐるようだ。

「ユーノ君が義弟になる日も近いわね…。」

「冷静に分析するな忍！ それは、ヤバいだろ！」

「お姉様どうしましょー！」

「とりあえず、すずか様を止めましょー！」

さつきまでのシリアスは、どこに行つたのや？。

「待つてよー！ ユーノ君」

「来ないでくれえええええ！」

もしかしたら、次に続くかも？

「マジかよおおおおおお！」

本当に子供もかー（後書き）

反省会

「もういやだああああああ！」

「フラグ全部回収だな。

「自重するんじやなかつたのかー！」

「ごめん…。

「また次回！」

問題は起りつけやすい……（前書き）

Count ジュルシード 現在ユーノが持っている数は
十一個！

誤字が多かったので、やり直しました。

問題は起こりやすい……

「うああああああああ！助けてくれえええ！」
「こんちわ憑依者ユーノだ！今日は、珍しく心の声からじやないんだよな。」

「待つてよ、ユーノ君。一緒に遊ぼうよ。」

すずかが、落ち着いてくれたな！」

俺は前回に引き続き、鬼ごっこをやつてゐる。

結構な時間帯で、屋敷の中を逃げ回つてゐるのだが、まだ治まつていないらしい。

「すずか様止まって下さい！」

「ヨーノ様が困っていますよ！」

アーリンとノエルが追いついてきた。

「おい一人とも！すずかの興奮つて後、どの位で、治まるんだ！」
「当分、止まりませんよ！でも、止める方法はただ一つ！」
「すずか様を気絶させて正気に戻すしかありません！」

氣絶つて……。すざかに乱暴な事なんて……。

「ユーノ君、一緒に気持ちいいこと。しよう」

「前言撤回！ 気絶させないと色々ヤバい気がする。」
だつて発言ヤバ過ぎる！

「ユーノ様、どうするんですか！？」

ファーリングが聞いてくる。

「瞬時に回り込んで、気絶させるしかない。」

「ですが、すずか様は勘がいいですよ？それに、ユーノ様の修行の影響もあります。」

ノエルに問題を指摘される。

「大丈夫だ！本当に一瞬で終わらせてやる！」

俺は、そう言うと同時に体に楯を纏い構えた。

「クロックアップ！」

ヒュン！

ドサッ！

「『えつ！』二人は、突然の事に驚いている。俺が、言葉を発する同時に姿を消し、遠く離れたすずかを抱き止めているのだから。

「つ、疲れたら。やっぱ、変身して使った方がいいな。体が持たん。

」
「そんな、言葉を吐き捨てながら鬼！」これは、終了した。

「『めんねユーノ君！私ったら…／＼。』

「いや、すずかが正気に戻つてくれて良かつた。」

あの後、目覚めたすずかは落ち着いていたが、今更自分の行為を恥ずかしがってるらしい。

「でも、すずかがあんなに大胆だったとは、思いもしなかつたぜ？」

「もう！ユーノ君からかうのは、やめてほしいよ…」そう言って怒っているが、どこか楽しそうなすずかであった。

今俺達は、とある部屋で休憩中だ。今は、本を読みあいながら樂しき過ごししている。

「ユーノ君も、本好きなんだね？」

「そう言つすずかもだつてそだる？」「には、珍らしい本があつて楽しいぜ！」

どうやら俺は、原作のユーノの趣味まで受け継いでいるらしい。

「喜んでもらえて何よりだよ」「うやつて本についてても話す事が出来るからもつと嬉しいし！」

「ああ！それといの前話したはやても本好きだから、今度一緒に語りうつせー！」

「うん 楽しみにしてるよー！」

仲良く過ごす二人であつた。

数時間後。

「失礼しまーす。」

ファリンが、紅茶を持ってきたようだ。

何故か女難な予感…。

「ファリン大丈夫か？変にヨタヨタしているが？」

「だ、大丈夫ですユーノ様！」

元気に返してきた。

「気を付けた方がいいよ？ファリンは、ドジつ娘だから。」

「これでは、ドジを踏みません！あつー！」

すずかに、言われ氣を取られたのか何もない所で、つまづきカップ

とお盆が宙に舞う。

本当にドジつ娘つているんだ。初めてみたぜ……。

俺は冷静に分析しながら、カップ達の落下地点に移動し

ポンポンポン！

両腕にカップを持ち、お盆は左足に引っ掛けで地面の落下を防いだ。

「師匠が言つてた。食器は人類の宝。何が何でも守れってな。」「余裕をかます俺であつた。

「すごいねユーノ君！」

「すごいですユーノ様！」

二人とも、感動するのはいいけど助けてくんないか。

「あっ！ユーノ様、今すぐ、助けます！」

ファリンが気づき近づいてきたのだが……。

「キャッ！」

「うおっ！」

今度は、ユーノの方に転んでしまった。

「あいたたた……」

ファリンは、転げてしまつたが何もないようだ。

「…………。」

一方ユーノは、バランスを崩した上に紅茶を頭からかぶつてしまつた。

だが、カップは律儀に守っていたため割れてはいない。
変な所で器用なユーノであった。

「すすすすみませんユーノ様！お怪我はありませんか！」
「俺は、まあ大丈夫だけどファリンは大丈夫か？」
盛大に転げてたしな。

「大丈夫ですけどユーノ様、紅茶が…。」

「まあ、拭けば大丈夫だろ？」

そう言つた直後…。

ペロッ！

「うわっ！」

「す、すずか様！」

すずかが、紅茶のついた俺の頬を舐めてきた。

「うん？舐めとつてあげようと思つて…。」

「普通タオルとかだろ！」

このお嬢様は、ほんとに何をしでかすかわからん。

「すずか様だけずるいです！」

ペロッ！

「……、おいファリン！お前まで何してる！」
「メイドとしてご奉仕しているだけです！」

「上手くまとめるなよ！」

何だこの状況！俺、補食動物か何か！

「むう！ ファリンは余計な事しないでー私が全部舐めてあげるからー！」

「いいえー私のせいなんですから、責任を持つて『奉仕させてもらいます！』

「どつちの発言も危なすぎんだけどー！」

言葉を考えてくれよマジで。

「じゃあどつちがコーノ君を満足させられるか勝負だよー！」

「望む所ですー！」

「せんでいいー！」

何故そういう話になんだよー！ タオルを持つてくるという選択肢はないのか！

心の中で本気で怒っているコーノである。

「コーノ君ー！」

「コーノ様ー！」

二人が俺に迫つてくる。

「やめろー！ 人とも、迫るなー！」 僕は、後ろにおいつめられていく。

「ぎゃあああああああー！」

――――――――――

「疲れたたぜ…。」

結局あの後、飴やソフトクリームのじく舐めまわされ精神的にヤバい。

だが、通りかかったバカップルになんとか助けてもらつたのだ。

忍さんは、大笑いされ恭也さんは、経験者のよつたな眼差しで強く生きると訴われた。

後、現在の俺はとこいつ。

「デカい風呂だな..。」

紅茶で汚れてしまったので風呂に入ってきたの

だ。

最初は、断りたかった。遠慮じゃなくて女難な意味で…。

ちなみに一人は、反省中で怒られています。

「早く体を洗つて上がって今日は帰らひつ。」

「なら、私が洗つて差し上げます。」

……………ん？

「どうしてノエルが、風呂場にいるんだ?後、せめてタオル巻いて

…。」

「これは、すいませんコーノ様。理由は、『奉仕です。』

何の問題もなじみに冷静に答えるノエル。

「帰る!」

回れ右でBダッシュの如く逃げようとするが。

「お待ち下さい!」

ムード!-

ノエルが抱きついてきた。

「つておい！抱きつくなそしてタオル巻いてくれ！」
胸の感触が直に感じるんだけど

「なら、ユーノ様？ 私に大人しく洗われて下さい。」

「いや、何で…！」

ムニコー！

「いいですよね？」

「わかつたから胸を押し付けんの止めろおおおおー！」

月村家、恐ろしい所です。

「どうですかユーノ様？」

「問題なしだ…。」

今は、背中を洗つてもらつている所だ。

「どうして目をつぶつているのですか？」

「ノエルが結局、タオルを巻いてくれないからだ！」

ちなみに俺は、ちゃんと巻いている。

「別に見てもよろしこですよ？」

「結構だ！」

少しば、警戒心を持つてくれないか。

「はい。終わりました。」

「まあ、一応ありがうどう。」

「いい加減目を開けたどうですか？そのままでは、先に進めません
よ？」

ノエル、お前は俺を陥れようとしてるのか。

だが甘いぞノエル！

「俺は、田を閉じながらでも感覚が掴めるんだ！」

そう言い、俺は風呂場を去つていた。

「残念です…。今度は、ファリンと協力をしてみるとしよう。何かを決意するメイドが一人いた。

「今日は、ありがとうございました。」

子供は帰る時間だ。

「また来てくれていいのよ？その時は、そっちの技術について教えてね！」

「こり忍。コーオに無理な頼みをするな。」

「え~いいじゃない！けちつ！」

「勘弁してくれよ忍さん…。」

教えた後、「アイツ」に怒らる。ただでさえ面倒事をアイツに押し付けてくるからな。

「ユーノ様！また、いらして下さいね！」

「なら、少しばかりのドジつ娘を直してくれよファリン？」

「はうっ！が、頑張ります！」

そう言い、両腕を「字に力を込めて宣言した。

「残念ですね…。もつとユーノ様とお話しをしたかったのですが…。」

「また今度来るよノエル。そん時は、落ち着いて話しがしたいな？」

「私は、今回みたいのがいいのですが?」

「それは、勘弁してくれ！」
何気に仲がいい二人である。

「ユーノ君！ 泊まつて行こうよー！」

「悪いな、すずか。居候先の天使様に怒らそつなんでな。」

最近、構つてもうえないから拗ねているしな。

「むつ～。なのはちゃんはづるいな～ユーノ君と一緒にいれて…。
暇を見つけて、泊まるのを考えてみるよ。」

「ほんと！ 約束だよー！」

「ああ！ 約束するぜ！」 帰ると直ちに、いつまでも元気な一人である。

「じゃあ、またな～！」

俺は最後に挨拶を済ませ用村家を去り一日は、終了した。

実は皆さん。今日の一日は、これだけでは終われなかつた。
この夜にある“異例”が起きた。

それは、この物語には関係しない全くの異例が現れた。
そう、俺（憑依者）のよつな…。

だが、今回は時間なこよつだ。この話をするのは、また次の機会になる。

せめて面白おかしく語りたいな。

一ヤツ！

問題は起いつます……（後書き）

反省会

「最後の前振りはなんだ？」
「何時になく冷静だな。
「ただ事じやないんだろ？」「
一言つたら出来るだけ面白おかしくするってな。
「わかったよ。また次回だ！」
「お楽しみに！」

相手は考へるべめだ（前書き）

Count ジェルシード 現在ユーノ達が持っている数は

十一個！

相手は考えるべきだ

今晩は、憑依者ユーノだ。俺は、今一人で夜の町の中を歩いている。理由があるとするならこの“異様”な気配についてだ。

俺は、結界を張り大声で叫んだ。

「いい加減出てきたらどうだ！正直、ウザインでな！」
俺が、喋り出した直後…。

「淫獸如きが、俺に命令するんじゃねえ！」
突然、真上から男が現れユーノに襲いかかった。

ドカアアアアアン！

ユーノがいた場所は、男の攻撃のせいで破壊された。

「はっ！淫獸がでしゃばるからそりゃなんだよー！大人しく俺の言う事を聞いてれば、いいんだよ！」

男は、今の攻撃でユーノを仕留めたと思っているらしい。

「その発言、そしてお前の持っているその武器、ヘラクレスの宝具…。」

どこからか声が、聞こえてくる。

「…、この声は淫獸か。今度こそ俺の【無限の剣製】の餌食にしてやる…。」

「やつぱり、アンタ転生者か…。面倒くさいヤツが出てきたな。
そついい、ゴーノはビルの上から男を見下ろしている。

「師匠達の能力か…。実に面倒くさい。

襲われているのに、冷静なゴーノであった。

「あつ！ テメエ！ 变態如きが主人公面か！ テメエは、お呼びじゃな
いんだよ！」

「それは、こっちのセリフだ。てか、俺が結界張つてなかつたら、
被害が…。」

「知るかよ！ テメエがそこにいたせいだ！ 他の人何かひとつでもいい
んだよ！」

「…はあ～。本当に最低系のやつて救いようがない…。」

呆れるゴーノであった。

「そんな事は、どうでもいい！ テメエはここで死ね！ 邪魔なんだよ
！」

男は、声を上げ俺に向かってくる。

「全く、イケメンのくせにそんな事やつていいのか？」
ゴーノは、余裕そうに答える。

実はこの男、顔がイケメンで年齢は、俺達と同じ位なのだ。

「俺に話し掛けんな淫獸が！ 同調開始！」
トース・オン

男は、両手に双剣の【干将・莫耶】を投影し襲いかかつたきた。

「危な…。」

男は、ユーノに右手で斬りかかったが、ユーノは難なく避けた。

「淫獸が！所詮テメエは逃げてるのがお似合いだ！最強でモテモテなオリ主な俺に殺さる！」

男…、オリ主はユーノに暴言を吐いたが…。

「最低でキモくてバカなお前に倒されるのは、やだから断る。」
皮肉に冷静で返すユーノであつた。

「ああん！舐めた事言つてんじゃねえ！」

オリ主は、ユーノの言葉にキレて攻撃を仕掛けた。

「うおっ！」

「そらそらー逃げないと殺しちまうぞー！」

今度は、ユーノが追い詰められていき防戦一方のようだ。

そしてユーノが、バランスを崩してしまつた。

「しまつた！」

焦るユーノ。

「口だけだつたな淫獸！死ね！」

左手で、ユーノの首目掛けて振るつた。

取つた！

オリ主は、そう思つたが予想を遙かに裏切られた。

ガキン！

「な……ん……だ……と……」

振るった剣は、ユーノの首に当たると同時に、折れた。

「やはり、強度がイマイチだ。ろくに練習もしていないんだな、オリ主君？」

余裕そうに答えるユーノ。

「なつ！ テメエ一体何しやがた！ 何で俺の剣が効かない！」

焦りだすオリ主。

「俺を知ってるんだろう？ なら話しさは簡単、俺は楯で身を守った。」

「ふざけんな！ そんなもんじこりあるー。」

「ネタバレするわけないだろ？ 後、それよつさー。」

ユーノの雰囲気が変わりだした。

「ビクッ！（何だよこの寒気はー、淫獸も意味がわからぬさぎるー、何だよアイツはー！）

恐怖を抱き始めるオリ主。

「貴様如きが、師匠の能力、“誇り”を汚すんじゃねえよー、ゲスが

！』

ブオオオオオオオ！

ユーノが、声を発すると同時に凄まじいフレッシュヤーがオリ主を襲

つた。

「う、うあああああああ！」

オリ主は、自暴自棄になりながらも剣を投影してきた。

ドゴン！

「グアアアアアアアアア！」

だがユーノは、瞬時に前に移動しオリ主に右ストレートを喰らわせ吹き飛ばした。

ドガガガガガガガガガ！

だがオリ主は中々止まる事が出来ずビルを破壊している。

「いつまで吹き飛ばされてんだア！オ・リ・主・クーン！」

「ぎやあああ！」

ユーノが、吹き飛ばされたオリ主に追いつき下に向かつてぶん殴つた。

ドカン！

「ぐあ！あ…ああ…う…ああー！」

止まつたオリ主は、見るに見かねない姿になつていた。

精神もいいとは言えず、泣き始めている。

「何なんだそのザマアはー最強のオリ主君がこんな事で泣いちまうのか！」

ユーノも地面に降りてきて声を上げる。

「違うだろガア！オリ主君ならそこは、敗者復活戦の如く俺に勝つてみろ！」

「う……う……ムリ……だ。」

掠れ掠れで声を出すオリ主。

「あアン！ふざけた事言つてんじやねエぞ！まだ、終わらせねえぞ！」

オリ主に突っ込むユーノ。

「うああああ！【偽・螺旋剣】（ガラドボルグ）！」

オリ主は、瞬時に投影し技を放った。

「だから、使うなって言つてんだろ！」

ユーノは、楯を纏つた右腕で振り払つた。

ドカン！

土煙が舞、視界が見えなくなつた。

だが、その先では…

「I am the bone my sword（体は剣で出来ている）

Steel is my body, and fire is my blood（血潮は鉄で、心は硝子）

I have created over a thousand blades（幾たびの戦場を越えて不敗）

Unknown to Death（ただ一度の敗走もなく）

Nor known to Life（ただ一度の理解もされない）

Have withstood pain to create

ガシャアアアアアアアアア！

世界が窓硝子が、割れるように破壊された。

「つああーお前それ【直視の魔眼】かーなんでテメホが！」
固有結界が破壊されたより、そっちが気になつたようだ。

「そんな事より、両手を見たらどうだ？」

「えつー。」

恐る恐る見た自分の両手は……。

無かつた……

ブシャアアアアアアアアア！

「つざやあああーお、俺の手があああああー！
手は、無くなり大量出血を起こしている。

「オリ主のくせに情けない。俺なんて何回、切断されたかわからん
ぞ？」

悪びれた様子もなく淡々と話すコーン。

「な、何でなんだよ！俺は、主人公なんだぞー何をやっても許さる
存在なのに！」

オリ主は泣きながら語り始めた。

「ああ～もういい。そろそろ帰らないと、なのはに怒らるから終わ
らせねば。」

俺は、トドメをさわづとする。

「まつ！待て！俺が悪かった！だから殺さないで！」
情けない声を出すオリ主。

「無理。だつてお前みたいなのはほつといたらなのは達が危ない。
絶対見逃したら、なのは達に近づいて迷惑を掛けるに違いないから
な。」

「く、くそあーお前といい、‘フェイト’、といこどりなつてやがる
ー！」

んつ？何だと？

「お前フェイトに会つたのか？」

「ああ、そうだよ！俺は友達になると言しながらフェイトを手に入
れようとしたからな！」

おい、まさかフェイトが“友達”に対して恐れていた理由つて：

「だが、何で家族一緒に仲良く過ごしてやがる！おかげで、拒絶さ
れるは嫌われるだで、大変なんだよー。」

お前のせいでのフェイトは…。

「だから“偽物”だつて言つてやたぜー！お前なんかただの“人形”
だつてなー！」

恐怖を抱くようになつてしまつたのか…

「だが、関係ない！そんな記憶を無くしてまた始めからやり直してやるぜ！そのために、ジルシードを集めてるんだ。今度こそ、俺の物にしてやるー。」

全部「トイツのせいか！

「遺言は済んだか？」

俺は、構える。

「お、おい淫獣！聞いてなかつたのか！俺には偉大な野望が……！」

「知るかよ。」

俺は、オリ主に近づいていく。

「ぐ、来るな！俺はまだこれからなんだーフロイトだけじゃない、他の女をみんな俺の物にするんだ！」

この男本当に救いようがない。何でもなると思つていやがるこの状況を……。

「もういい、『墮ちる』。」

ユーノが言葉を発すると同時にオリ主の周りには紫色の穴が開き無数の手が出現し引きずり始めた。

「うあああああー何だよこれはあああー！」

「一度とお前が、フロイト達の顔を見れないようにするための拷問部屋だ。」

「ふざけんな！誰がこんなの望むんだよー！」

段々落ちていいく。

「俺に決まってるだろー。お前はバカか！散々、暴言を吐かれ襲われた挙げ句、大事な友達まで手を上げたお前を誰が望むと言つたら俺に決まってる！」

そう、フュイトにこんな残酷な事はさせないー俺が決着をつける。

「うああああああああーやだ！死にたくないよおおおおおおー。」
オリ主は、とうとう穴に墮ちていった。

俺は、穴を閉じ背を向けてこいつ吐き捨てた。

「墮ちる。そして“廻れ”！」

「はあー。随分遅くなっちゃったぜ。」

俺は、そつきの戦いを終了し家の前にいる。

「ただい「ゴーー君ー」つまー。」

開けると同時になのはに抱きつかれた。

「お、おいーどうしたなのはー。」
まさかまた何かあったのか！

「ゴーー君ー私と“キス”しよー。」

「シリアルの空気を返せええええー！てか、何でそつなるー。」

「すずかちゃんから血煙気に聞かされたのー。ゴーー君と唇でキスし

たつて！

「すずかあああああああ！」

「アイツは、何がしたいんだよ！」

「という事で、その唇を頂戴するよー。」
なのはが迫ってきた。

「戦略的撤退！」

「待てなのーー！」

家の中でもまた鬼ごっこが発生したとさ。

全くシリアスに終われないのかよ。

でも、なのは達を守る事が出来たし良かつた。

だがこれからもきっと転生者は増え続ける。良い方にも悪い方にも
…。

まあ、関係ないけどな！俺は自分のやりたいように物語を進めて行
くだけだからやー。

「ユーノ君ーいい加減捕まつてほしいのー！」

「だから、シリアスで終わらせろおおおおおー。
鬼ごっこの中に入っていたようだ。

「ついで本当に一回は覗いてこつた。

余談だが、ジエルシードは一個回収したそうだ。

相手は考へるべれだ（後書き）

「反省会

「転生者か……。」

「どうした？」

「性格の良い転生者なら色々任せらるの……。」「もし、出てきてもお前の出番変わらないぞ……。」

「マジか！」

「また次回！」

「お楽しみに！』

意外な事はつきものだー（前書き）

Count ジュエルシード 現在ユーノ達が持っている数は
十三個！

意外な事はつきものだ！

何時もより、眠い憑依者ユーノだ。

昨日、転生者やら何やらで大変だった。

なのはとの鬼「」も何事もなく終わり就寝しました。

そんな事より早く起きないと。

体を起こし田を開けたら

「んつ」

「んつ？」

起きた田の前にいたのは、田を開じて俺にキスをしてくるなのはだつた。

あれ？俺まだ寝ぼけてんのか？

「んつー

嬉しそうにキスを続けるのは。

「現実か——！」

俺は、直ぐになのはを離した。

「ブハアー！もうユーノ君！まだ物足りないのー！」

「何でなのはが怒んだよーてか、何やけに手の込んだ事しゃがるー。」

「だってユーノ君が昨日してくれなかつたから、おはよつのキスで起こしてあげようと思つて…。」

恥ずかしそうにもじもじしながらのはが言つ。

「俺が起きてなくとも結局やられてたのかよー。どっちにしろ逃げ場がないユーノであつた。」

「朝からやけに濃い目にあつた。」

「お前も色々と大変だなユーノ。」

現在俺は、朝食を食べ終わり恭也さんと話している所だ。

何気に相談相手みたいな立場になつています。

「それよりユーノ。この前話した知り合つた友達は、いつ紹介するんだ？」

恭也さんが突然質問してきた。

「えつ？ 何で？」

「その友達は、女の子なんだろ？ 下手に紹介を遅れさせたら、ユーノが危ないんじゃないのか？」

「……ヤバい。本当にそんな気がしてきた。」

フェイトやはやてを紹介したのはいいが、まだどうもなのは達と面識がないからな。

早く紹介しないと何か誤解が出てからじや遅い。特にはやてとか…。

余裕そうに高笑いをする狸娘のビジョンが頭に浮かぶ。

「よし！ 何か計画を立てるぜ！」

「——は決意をしたようだ。

「どうやって紹介するんだ?」

「うーん。何か良い手はないものか~?」

恭也に指摘され考え込むコーノ。

「俺も今田は、用事がないから一緒に考えるぞ?『心配をする恭也』。

「んつ?お店も休みなのか?」

「ああ。みんな今日は暇になるな。」

恭也さんにそう言われて俺は、閃いた。

「それだ!恭也さんナイスだぜ!」

俺は、サムズアップをする。

「んつ?何か思いついたのか?」

「ああ!みんなを呼んでパーティーを開く!」

「なるほど。それなら、一気に紹介も出来ていーな。場所はどうす るんだ?」

「はやての家で開く!無理はさせたくないし何気に広いから大丈夫だ!」

「本人の許可は?」

「大丈夫だ。多分問題ない！」

「多分つて、後、何時実行するんだ？」

恭也さんが聞いてくる。

「今日の夜だ！」

「それは、また急だな…。」

大丈夫なのかと言つ田で見てくる。

「よし！善は急げだ！早速行動だ！恭也さん、なのは達に連絡よう
しく！」

俺はその場から去る。

「ユーノー・ビニに行く！」

「はやてやフロイトに直接伝えて来るぜ！後、よろしくなー。
そつ言い俺は完全に姿を消した。

残された恭也は…。

「電話を使えよユーノー…。」

文句を垂れ流らなもしおがないといった感じで、ユーノーの言われた
事をやつていてるようだ。

場所はやての家

「失礼しまーーーす！」

俺は、何の予告もなしに家に入つていった。

「あやあああああ…」、コーカー君！ノック位はしそー。突然の訪問に飛び跳ねるように驚くべや。

「悪い。後、はやて今日は暇か！？」

やけに興奮なみに近づきながらコーカーが聞いてくる。

「えつ、えつ！ コーカー君じゃないしたんや！？（来ててくれたのは嬉しいんやナジ今田のコーカー君、積極的やないか？）」顔をほんのり赤らめながら考え込むはやて。

「今日、はやての家でパーティーを開きたいんだけどいいか？」

「えつ？ 何でなん？」

予想外の答えが出たと悪びはやて。

「俺の友達を紹介したいんだ！ はやてが迷惑じやなけばいいんだけど…。」

難しい顔で聞いてくるコーカー。

「うひん…全然問題なしやむじふ嬉しこー！」笑顔ではやてが許可した。

「せうか！ なら、今日の夜にやるから色々と準備して来るからなー。」

「うん でも本当に嬉しいなー。」

はやては、本当に楽しそうにしてこる。

「やっぱ、嬉しいよな？」

「勿論やでー友達になつて色々話したい事があるんやーそれ[元]…。」

「それ[元]?」

あれ?何か嫌な予感…。

「ユーノ君がうちの“家族”やつて事も言わんとあかんしなー」

「またそのネタかあああー!」

「イツは、本当に懲りないヤツだ。」

「普通に友達つて言えよー!」

なのは達に言つたら何されるかわからん。」

「そんなユーノ君ーあの言葉は嘘やつたんかーうわーん、ユーノ君
に持て遊ばれたー」

「何故そつなるーとか嘘泣き止めろー俺が全部悪いみたいだー!
またまた焦り出すユーノ。」

「うわーん!町の人達に言いつけてやるー」

そう言い扉の前まで進むはやて。

「貴様は鬼か!俺の事を社会的抹殺するつもりか!
急いで止めに入るユーノ。」

「離してえなー今まで私に嘘を言つて騙してたんやろーー?」

「何、毎ドリアみたいな味を出しつてやがるー全然ドロドロしてねえぞ
!」

「だから今から既成事実を作りに行くんや～」
素晴らしい笑顔でとてつもない毒を吐くはやで。

結局この後、町に言いふらす事は、なかつたがはやはては心底楽しそうな顔していた。

本当に何が何でもいいから、ハリケンが荒れそよぎだ。

そう思いながら俺は、次にフロイトの家に向かつたのであつた。

場所フェイトの家

「失礼しまーーーす！」

懲りずにまた同じやり方で入るユーノ。

だがその先には……

「えつ？」

風呂上がりで艶々な体で裸で立っていた“リース”がいた。

「ふえ／＼＼＼！ユ、ユーノ！見ない「失礼しました——！」（バタン！）」…少し位みてもいいのに…。」

ユーノは、直ぐに理解をし扉を閉め外に出た。

一方リースは、恥ずかしいけど見てもらいたかつたと言う曖昧な事を考えながら頬赤らめ、呆然と立つていた。

數十分後

「本当にすまん！」

俺、現在マジ土下座で謝ります。

「あ、気にしないで下さ」。私は気にしていませんから…。
そう言いつつも顔が赤いリースであった。

「なんだいユーノ？ 裸がみたいでんならあたしが見せようか？」
アルフが話しに入ってきた。

「俺、今その事で謝罪してるのになんで、罪を大きくしなきゃならないんだよ！」

「えつ？ 単純にあたしが見てもらいたいからだよ？」
何の問題なく答えを出すアルフ。

「いや、本人良くて周囲から見れば俺が悪いんだよー。」
発情期なんじやねえのかこの狼！

「止めないさいアルフ！」

今度は、プレシアさんが入ってきた。

「ユーノ君が嫌がっているのに無理な事言つちやダメよー。」
「つまー！ プレシアさんがまともだ！ そのままアルフに言つてやれ
！」

俺は感動だ。プレシアさんが正常になつてくれた！

だが俺の考えは、次の言葉で裏切られた。

「きつとユーノ君は、恥ずかしくて本音を言い出せないだけなのよ
！ 察してあげなさい！」

そう言い、俺を後ろから抱き締めた。

「違うわボケえええ！後、抱き締めんな！胸押し付けんな！」
本当にこの母親、口クな事を言わないな。

「恥ずかしがらなくていいのよコーノ君 私が満足させてあげる」

艶やかな顔で誘惑するプレシアだが…。

「何をだあ！てか離せ！話しが出来ない！」
全くコーノは、気づいていないようだ。

「何だいコーノ。そいつ事ならそいつ言えばじやないか？」

「違うからアルフ！俺の本心じゃないから！」

「照れなくてもいいんだよコーノ」

アルフも笑つて返した。

「照れてねええええ！おいリースー！」の一人何とかしてくれ！
俺は、リースの方に視線を向ける。

「な、なるほど。コ、コーノも年頃の男の子なんですから、見たい
と思つてもしょがないないですな！」
何か納得してる！だから！「プレシアさん麗だから！
丽

「リースー！お前は、純粹なままでいてくれるよな！
じゃなきや俺の味方が…！」

「なら、また見せても問題ないですね！」

「越えてきたああああ…や、止めるリース早まるな…」

俺は、リースを止めようとするが、捕まつていて動けない。

「だ、大丈夫ですユーノ！私は、恥ずかしくありません！むしろ見て下さい！」

「あれっ！リースの方が発情期入つてない！誰だよ管理者…何とか話しを伸ばすユーノ。

「私よ

」

プレシアさんが声をあげた。

「あんたかよ！」

グッ！この状況どうすれば…。そうだフェイトだ！アイツは、純粋だからきっと止めてくれる！

俺は、急いで探そうとしたが必要なかつた。

何故なら…。

「……………」

既にオーバーヒートをして倒れているフェイトを見つけたからだ。

「純情すぎるぞ！フェイト――！」

俺はフェイトに思いつきり叫んだ。

「さあ、ユーノ大人しく…。」「リースが近づき。

「ユの状況を…。」

アルフも近づき。

「楽しみましょ

ナレシアさんは、抱き締めるのを強めた。

「ああああああああああ！」

「
」

「そりだフェイト。どうだ今日の夜なんだけど。」

「うん！絶対にいくよ！楽しみにしてるね

「それは、良かつた。

僕は無事は二ヶ月は話しをやる事ができた

ちなみに他の三人は……。

「すいませんでしたユーノ。」

「離しておくれよ。」

「ユーノ君は、こういうプレイが好きなのかしら?」

やられる前に、チューインガムでケルケル巻きにして放置している。

てか、プレシアさん反省してくれマジで。

「でも、突然どうしたの？」
フェイドが聞いてくる。

「フロイトにさ、いっぱい友達を作つてほしいからだ。」

「えつ？」

「これは本當だ。もう、フロイトを怖がらせた転生者はいない。だから、今度こそ友達を作つてほし！」

「わ、私に出来るかな？」

「どこか不安そうに答えるフロイト。

「前にも言つたろ？ 恐れるなよ。フロイトが恐れず勇氣を出したから、俺は友達になつたんだ。」

フロイトの頭を撫でるゴー。

「ゴー……。」

くすぐつたそつに見上げるフロイト。

「心配なら一緒にいてやる。だから、がんばろうぜっ。」

笑顔で返すゴー。

「うん！ 私頑張つてみるよ！」

れつきまでの不安な様子はなく明るくなつた。

「そつか。頑張れよ。」

俺は、手を離した。

「あつ。ゴーまだお願ひできないかな？ 撫でるの……。」
恥ずかしそうに聞いてくる。

「了解。」

「んつ……。」

また、撫で始まりフェイトも目を閉じながら堪能している。

「何か、ユーノには助けられてばかりだね？私は何もしてないのに。」

頭を撫で終わリフェイトがユーノに聞いた。ちなみに一度帰宅する所だ。

「フェイトだつて、ジェルシードを集めてくれたろ？それでお相手だ。」

「でも……。」

まだ、納得がいかないようだ。

「何も今すぐじゃくともいいんだぜ？ ゆっくり考えていけばいいんだよ。」

「よろしい、じゃ、また夜でな。」

ガチャ！

ユーノが扉を開け、帰ろうとする。

「ユーノ待つて！」

「んっ？…どうしたフュイト？」
俺は、フュイトの方に振り向く。

「今、お礼が思いついたよー。」
そういう俺に抱きついた。

「えっ！フュイト！」

俺は、驚いている間にフュイトは俺の耳元で呟いた。

「ありがとう助けてくれて。……ユーノあなたが好きです。」

「えっ？最後よく聞い…え…。」
質問しようとしたらい。

チユツ！

「んっ…。」

「んっ！」

唇で塞がれた。

キスは、触れだけのキスで終わり、すぐに離した。

「フ、フュイト？」

「じゃ、じゃあ夜樂しみしてるねー。」
そう言つと部屋に入つていってしまった。

残されたユーノは…。

「……色々と破壊力ありすぎたろ。」

今回は、渋々帰る事しかできなかつた。

「こんな調子でパーティーは、無事に開き終わるのだろうかと考える
ユーノで合つた。

オマケ

「完全に私達、忘れられますね？」

「ユーノ！ 帰るんなら解除してから帰つておくれよ～！」

「流石は私の娘ねあなどれないわ。次は、どんな手を使おつかしら
？」

まだ縛られているようだ。ちなみに、時限式だつたらじへこの後す
ぐに解除されたそうだ。

意外な事はつきものだ！（後書き）

反省会

「珍しいな。一度の話しだけでまとまらないなんて。」

「力つきてしまつたからな。」

「ああ、ただ限界がきただけか。次、大丈夫なのか？」

「何とかしてみせる。」

「そうかい。また次回だ！」

「よければ、お楽しみに〜！」

パーティ一いつて疲れます。（前書き）

Count ジュエルシード現在ユーノ達が持っている数は

十三個！

パーティーって疲れます。

……憑依者ユーノだ。俺は、パーティーを開こうと頑張っていたのだが、始める前から色々な事があり過ぎて不安になってしまはず。

そして現在俺はと言いつと。

「重い…。」

大量の買い物袋をぶら下げながら、はやての家に向かってる所だ。パーティーの出し物は、早急なので焼き肉にする事にし、俺一人で買い出しを終わらせてきた。

鉄板などは、土郎さん達に任せである。

「だが少し失敗したな。あまりにも荷物が多過ぎる、誰か連れてくればよかつた…。」

俺は、子供では持てないような量を持って歩いている。張り切り過ぎたな。

「全く何やつてんのよアンタは？」

突然後ろから声を掛けられた。

「んっ？アリサ？どうした。迷子か？」

「何でそなんのよ！偶然見かけたから、声を掛けただけよ！」

「何だ…。つづき心配して来てくれたと思ったのによ。」

本音を心の内にぶちまけながら顔を真つ赤にして否定するアリサだった。

「まあ、アリサが心配して来てくれて嬉しいぜ。ありがとな。」

「ううーーー。だから違うって……」

此処まで来てまだ本音を隠そうとするアリサ。

「俺がそう思いたいんだよ。どんな理由であれ、俺に声を掛けてくれたんだからさ。だから、ありがとう」

笑顔で伝えるユーノ。

「か、勝手にそつ思つてなさこよー。(言わなくてもわかつてくれたのかな?…ありがとウゴー。)」

そっぽを向くアリサだが、その顔はとても嬉しそうだった。

「そりゃまだいい。ま、早く行こうよアリサ。

そう言ひ先を歩いていくコーン。

「あつーひよつと待ちなさいよ！普通おいてかないでしょ！」

急いでユーノに追いつけアリサ。

「いや、もう夕方だぜ？早く向かわないとな。」

そつなんだかんだで、今は夕方なのである。

「なら、私も持つの手伝つわー。」

「無理だ。子供がもてる量じゃなー。」

「アンタだつて私達と同じ年でしょうがー。」

小馬鹿にされて怒るアリサ。

「気にするな。問題ないからさー。」

そう言ひ足を早めるユーノ。ついでに顔が笑つてゐる。

「逃げるなユーノー！後、やつぱり馬鹿にしてたわねえ！」

ユーノを追いながらその事に気がつくアリサだった。

結局ユーノは、逃げ切りはやての家についたやうだ。

始めのあれは、ただの愚痴だつたようだ。

そして夜……。

「どうもーお集まつた皆さんー！本日はこのパーティーに参加頂き誠にありがとうございましたー！」

始めからテンションの高いユーノである。

「今日は、仲を深めるためのパーティーだ！存分に楽しんでくれ！」

「その前に近所迷惑よ！バカユーノ！」

バシン！

アリサがユーノの頭を叩いた。

「いで！何だよアリサ！まださつきの事根に持つてんのかよ。びっくりしてマイク落とす所だつたぜ……。」

「別に思つてないわよ！とかマイクなんてどこにもないわよー。」

「ナイスツッパリやでアリサちゃん！ユーノ君のボケをズバッと決めたでー！」

「いや、どちらかと言つて頭の攻撃の方が決まってるのー。」

「ユーノ君大丈夫？後、血を飲ませてー。」

「だ、駄目だよすずか！ユーノが困るに決まってるよー。」

「その通りだぜフェイトーでか、すずか自重をしろー。」

既に力オスに仕上がっているようだ。

パーティーは、無事に始まりお互いの紹介も終わった。後、この際

だから、隠し事はなしう事になり秘密をばらしてしまった。だが、何事もなくパーティーは続けられているようだ。

「ほりほり、喧嘩してないで。焼きあがってきたから食べなさい。」

桃子さんが、話しを止め食べるのを進めてきた。

「一時休戦だせー！」

「レッシィーーやでコーン君ー！」

直ぐにコーンは、気持ちを切り替えはやての車椅子を押し、走り出した。

「何気に息ピッタリねあの二人ー！」

「スピードも速すぎるのでー！」

「いいなーはやて。コーンに押してもらえて。。。」

「感心してた場合じやないよみんなー早くコーン君達を追いかけよー！」

すずかの号令で、瞬時に向かうのだった。

「肉は頂いたー！」

コーンは、箸で素早く取ろうとする。

「甘いよコーン！それはあたしのわー！」

バツ！

アルフに横取りされた。

「ゲッ！おいやアルフ！俺が育てた肉をよくもー。」

「いのうのは早い物勝ち「取りましたああー」あつー！ファリン！
あたしの肉を取るんじゃないよ！」

今度は、ファリンも参戦したようだ。

「油断禁物です！」の調子で「なめんじやないわよー！」あーアリ
サ様酷いです！それは私が！」

アリサも参戦してきたようだ。

「敵は一人じゃないのよー！アンタが甘かっただけよー。」

ビシッと決めるアリサ。

「てか、俺まだ一枚も食べてないんだけどー！自腹なんだから俺にも
食わせやがれ！」

何気に材料は、自腹だつたらしい。

一方他のメンバーは…

「忍さん。私にもお肉と野菜頬むわー。」

「待つてはやてちゃん。今取つてあげるわ。」

平和に楽しんでいたようだ。

「はー、せやへやん。どうでー」

「あつがとうな感わん ついでにその胸を揉ませてもいいドーー。」

ムードー

「わやあーー、うう…あ…もん…じゅ…あんー。」

ムードー

「おお~いこ胸しどるど~感わんー最高やー。」

胸をお構いなしに揉み楽しんでいたせやし。

「君はえりのH口親父だはやて。いい加減に離してやれ。」

流石に見てござられなくなつたのか、恭也が止めに入つた。

「あ~ん。離してな~恭也わん。まだ、堪能したりないんや~。」

「子供の教育上よくないから黙田だ。」

「しゃあない。また別の獲物のを探すしかないな~!」

まだ憲りないはやてである。

「はあ~。忍大丈夫か?随分持て遊ばれたよ'だが?」

「恭也！。私はイツチ入ちゃたみたい。今から、しよ」

とても艶やかな顔をして誘う忍が、出来上がっていた。

「お、おい忍！それはヤバいだろ！」

「だつて、最近お預けだつたからたまつてゐるのよ。だから、やら

忍は飛び跳ね恭也に抱きついた。

「うわあー、自重をしてくれ忍ーはやてが見てるんだぞー。」

恭也は何か事態を立て直そうとはやてに視線を向ける。

「レ・ル・ウ・シ・エ・リ」

既にはやては遠く離れ手を振りながら去つていた。

「なぜか！」

そう言われ連れ去られる恭也。

「うわああああああ！」

——この後恭也さんの姿を見た者は、誰もいなかつた

「死んでないぞ！ というか変なナレーションを入れる位なら助ける
ユーノ！」

「否ーー我は天の「肉ゲットよー」」
アリサー俺の肉とんじやねえ！

「隠す氣あるのかコーコー！」

「もつ…恭…也…集中…して…」

「血量をしろおおおおおおおー！」

またまた他のメンバーは…。

「んつ？今、恭ちゃんの声がしなかつた？」

「空耳じゃないんですか？」

「やうだね。」めんねフエイトちゃん。変な事言つて。」

「お姉ちゃんお肉取つてなの～。」

「私のがあるからあげるよなのはちゃん。」

四人の女子メンバーで固められていた。

「そう言えば、私三人に聞きたい事があるんだよね～」

美由希が突然話題を出してきた。

「コーンとは、どこまでやつたの？」

「「「えつ／＼／＼／＼」」

ガールズトークのよ'うだ。

「え……いや……あの……ユーノとは……ううへへへへへ。」

聞かれただけなのにもう顔を赤らめ恥ずかしがつてのフュイト。

「フュイトちやん可愛いい！ハグわせーーー！」

美由希がフュイトに抱きついた。

「ふえ！は、恥ずかしいですよ美由希さん！」

抱きつかれて慌てだすフュイト。

「あの様子だとフュイトちやんもユーノ君とキスをしたに決まってるのー！」

「フュイトちやん… 純粹に見えて意外に大胆なんだ。私も頑張らないとね」

争い事はなかつたが、新たな波乱が生まれそうな感じで合つた。

後、こんな二人組もいました…。

「ノーハルさんは、ユーノに裸を見せたのですか！」

「そう思つたのですが、ユーノ様は直ぐに口を開つてしまいした…。

お互ひの裸を見せてしまつた時の話をしていくよ'うだ。

「えっと、恥ずかしかつたんですか／／／？」

「とても恥ずかしかつたですが、好いている方に見てもらいくと思
えば問題ありません／／／。」

「な、なるほど…勉強になります！」

「私の考え方で満足してもらえてよかったです。」

ガシッ！

変な友情が芽生え握手をする一人で合つた。

最後に親達…。

「まあ ゴーの君の事を」

「ええ とても気に入つたから私の夫にじよつと考へてるのよ」

「でも、なのは達は手強いと思ひますよ？」

ゴーの事について話していくよひだ。

「一番手強いと言つたらゴーの君の方ね！」

フレシアが声を上げた。

「確かにそうね～昔の恭也を思い出すわ～」

桃子も同意するような言い方をする。

「いや、桃子。コーノ君のは、相当酷いものだと思つた？」

士郎がそれだけでは、終わらないと言つた顔で伝えた。

そしてパーティーは、こんな感じで終わつていつた。

「ふあ～。眠い。」

パーティーは、終わりみんな帰つていった。一人真っ白いのがいたのは氣のせ이다。ついでに俺もあの後色々やられました。あえて語らないぜ！

俺も帰るか。

「アサヒ」

帰る道にネコが右腕をケガをしていた。

「ん？」「前のネコか？」

俺は近づきケガをみた。

「待つてろ。直ぐに治してやる。」

ユーノが右手をケガに翳すと。

パアアアアアア！

光輝きネコのケガを治した。

「これで大丈夫だ……。」

ユーノはネコの頭を撫でる。

「こやー」「

ネコも嬉しそうに堪能する。

「……にいたんじゅ、危なーから移動してやるか。」

ヒョイツ！

ユーノは、ネコの体を持ち上げた瞬間…。

「こやー。」

ネコの攻撃がきた。

「悪夢再びーぎやあああー！」

ユーノは攻撃にあい手を離しネコは逃げていった。

「……俺、ただ単に動物に嫌われるだけなんじゃね？」

リアルに傷つきながら帰るユーノだった。

オマケ

ある場所…。

「うん？ 口ッテ、右手どうしたの？」

「えつ！な、何で！」

「だつて嬉しそうに右手を見ながらさすつてるから…。」

「何でもないよー」(アリアから聞いて興味本位で行つただけなのに
。)」

「（本気になりかけちゃった／＼＼＼。あの魔法、とっても暖かくて気持ち良かつた 最後に胸を揉まれたのはびっくりしたけど。）」

「アーリーのヨロツクナ?」

「えっ、いやだから何でもないよー。」

「怪しい、薄情しろ——！」

「せきああああああ！」

本当に終わりです。

パーティーって疲れます。（後書き）

反省会

「登録が100越えたな。」

「んつ？今日の事についていいのか？」

「あえてスルーだ…。」

「そうか。まあ、素直に嬉しいけどな。

「ちゃんと更新進めろよ？」

「久しぶりにフレッシャー掛けてきたな…。」

「また次回だ！」

「良ければお楽しみに！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2841z/>

憑依者ユーノの物語

2011年12月28日22時50分発行